



(1)人面付き土器



(2)人面付き土器

1. 温江遺跡第6次発掘調査報告

1. はじめに

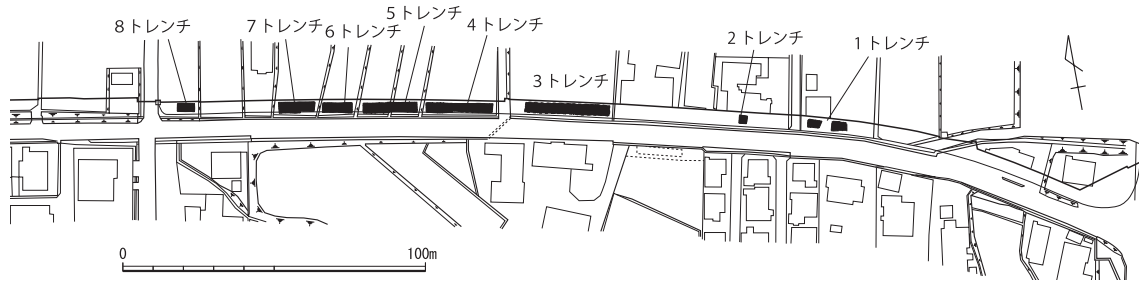
温江遺跡は、加悦谷のほぼ中央部、東から西に張り出す丘陵上に位置している。この丘陵は、西側に突出した、南北900m、東西600mの三角形を呈しており、丘陵の北辺には蛭子山古墳・作山古墳があり、東の山裾には温江大塚古墳や温江丸山古墳が造られている。南には、谷を隔てた丘陵上に、後野円山1・2号墳や鳴谷東古墳群が造られている。この地域は与謝野町はもとより、丹後地域でも大規模な古墳が集中するところとして知られている(第1図)。

それに対して、こういった古墳群を造営した集落の実態についてはよくわかっていない。温江遺跡は広い丘陵上に立地しており、そういった古墳群を造営した集落の一つである可能性が考えられている。今までに5次にわたる調査が実施されているが、遺跡の詳細はよくわかっていない。温江遺跡の第1・2次調査は、昭和63年度・平成元年度に、国道176号バイパスの建設時に実施



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 四辻・大江山)

- | | | | | | |
|-------------|--------------|-----------|-------------|----------|-----------|
| 1. 温江遺跡 | 2. 日吉ヶ丘遺跡 | 3. 蔵ヶ崎遺跡 | 4. 須代遺跡 | 5. 火口遺跡 | 6. フカサ遺跡 |
| 7. 黒谷遺跡 | 8. 河ノ辺遺跡 | 9. 芦ノ谷遺跡 | 10. 裏ノ谷遺跡 | 11. 谷垣遺跡 | 12. 中上司遺跡 |
| 13. 鳴谷遺跡 | 14. 嗎岡遺跡 | 15. 井前遺跡 | 16. 駒田遺跡 | 17. 福井遺跡 | |
| a. 蛭子山1～8号墳 | b. 作山1～5号墳 | c. 温江丸山古墳 | d. 温江大塚古墳 | | |
| e. 小虫古墳群 | f. 後野円山1・2号墳 | g. 鳴谷東古墳群 | h. 明石愛宕山古墳群 | | |
- (古墳・古墳群は主要なもののみ、中世山城関係は省略した)



第2図 調査トレンチ配置図

された。この時の調査では、遺跡のほぼ中央を南北に貫く形で発掘調査が行われ、弥生時代後期、古墳時代後期および平安時代の遺構が確認されている。その後の旧加悦町教育委員会により店舗新築工事に伴う調査や道路の拡幅工事に伴う調査が実施されている(3～5次)が、その時の知見を大きく変えるような成果は得られていない。

今回、国道176号バイパス以西で京都府が府道温江加悦線の道路緊急安全確保小規模改良(交安)事業を計画し、その事前調査として発掘調査を実施した。この調査は、与謝郡与謝野町加悦地内で実施し、温江遺跡の第6次調査にあたる。

府道温江加悦線は、遺跡範囲のやや南側をほぼ東西に貫通しており、道路の北側を幅約5mにわたって拡幅する計画であった。このうち、温江遺跡の範囲となるのは、総長約250mの部分である。調査対象地は、田畑と住宅地として利用されており、府道温江加悦線に直交して生活道路や畦畔が南北に取り付いている(図版第1-(1)・(2))。畦畔の保護のため、耕作地については基本的に、一筆毎に調査地を設定し、住宅の前面については、生活に支障のない範囲で調査を実施することとし、一部の宅地前面では調査を行わないこととした。最終的に、8か所の調査区を設けて、計約125mの長さにならって調査を実施することとした。東から西に向けて、1～8トレンチとした。また、各調査地の周囲に安全フェンスを設置したため、幅約5mの調査対象地内に幅約3mのトレンチを設けるのが精一杯であった。

温江遺跡では国道176号より西側では発掘調査が実施されていないため、国道176号の西側では

付表1 調査トレンチ概要

トレンチ	面積㎡	概要	調査
1トレンチ	25.0	水性堆積層を確認	反転調査
2トレンチ	6.8	水性堆積層を確認	西半のみ
3トレンチ	96.0	弥生時代前期溝・ピット・土坑、弥生時代後期～古墳時代前期溝・土坑	反転調査
4トレンチ	62.9	弥生時代前期～古墳時代前期土坑・ピット、現代土坑	反転調査
5トレンチ	57.0	弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2、掘立柱建物跡(柵)1、現代土坑	反転調査
6トレンチ	31.5	弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2、古墳時代後期か溝	反転調査
7トレンチ	39.5	弥生時代前期溝、弥生時代前期～古墳時代前期竪穴式住居跡2	反転調査
8トレンチ	14.8	現代溝	東半のみ

遺構が遺存しているのかどうかという点も含めて遺跡の実態がわかっていないこと、排土を置く場所が近くに確保できないということから、まず、8か所の調査対象地内のほぼ1/2を掘削・調査し、残りの半分を排土置き場とすることとした。

そして、遺構・遺物の有無を確認した上で、必要に応じて、調査済みのトレンチを埋め戻した上で、残りの半分を調査することとした。結果的には、8本のトレンチのうち、1トレンチでは壁面の崩落のため、2・8トレンチでは顕著な遺構・遺物を確認できなかったため、全面的調査を実施しなかった。1～8トレンチの総調査面積は333.5㎡である。各トレンチの概要は別表のとおりである。

調査期間は平成20年11月25日～平成21年2月13日までを要した。調査期間中の2月6日に、地元の温江・加悦地区住民を対象に説明会を実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長石井清司、同主任調査員岩松保が担当し、平成21年度に整理作業を行った。現地調査及び整理作業に係わり、京都府教育委員会・与謝野町教育委員会には多大なご協力をいただいた。発掘調査・整理作業に関わる経費は、京都府建設交通部が負担した。現地調査・整理作業には多くの方々に参加していただいた。また、人面付き土器の評価については、設楽博己、山田康弘、深澤芳樹、大野薫各氏にご教示を得た。ここに記して、お礼を申し上げます。

2. 温江遺跡と周辺遺跡の調査(第1図)

今回の温江遺跡の調査では、後述のように、弥生時代～古墳時代の集落遺構を確認した。以下、旧加悦町内の弥生時代と古墳時代を中心に、周辺遺跡の内容を概観したい。

弥生時代前期の遺跡には蔵ヶ崎遺跡がある。蔵ヶ崎遺跡では、弥生時代の溝、矢板列、土坑、奈良時代以前に造られた水田などが調査されている。弥生時代の溝は、前期中頃のものが2条、中期のものが1条あり、後者には矢板列が設けられていた。これらは水稻耕作に伴う水路であり、居住関連の遺構は確認されていないが、加悦谷でいち早く水田を営んだ遺跡である。

弥生時代中期の遺跡には、日吉ヶ丘遺跡、須代遺跡がある。日吉ヶ丘遺跡は台地上に立地し、弥生時代中期中葉～後葉にかけての環濠、貼り石をもつ墳墓、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡が調査されている。遺物には、多量の土器の他、玉原石や未製品、石鋸、筋砥石などの玉作り関連遺物、鍛造鉄器や鉄滓、鉄製品を磨いた砥石など一般集落とは異なる遺物が出土しており、大型の墳墓を検出したことから、この地域を代表する拠点集落と考えられている。

須代遺跡は小扇状地に位置する遺跡で、弥生時代中期～後期、古墳時代末期～平安時代末期の遺構が検出されている。特に注目されるのが、幅約5m、深さ約1mの大溝で、弥生時代中期後半に掘削され、後期後半まで存続したようで、集落を巡る環濠と推測されている。弥生時代中期中頃～後半にかけての竪穴式住居跡3基が見つかっている。また、須代遺跡の東に位置する須代神社裏山からは、須代銅鐸が発見されている。

温江遺跡では、国道176号バイパスの建設時に弥生時代後期の貯蔵穴状の土坑が調査されている。集落の実態は不明であるが、後期の集落が周辺に広がっていることは確実である。また、古墳時代後期の竪穴式住居跡が調査されている。

駒田遺跡は野田川の左岸に位置し、古墳時代前期の竪穴式住居跡と飛鳥時代の竪穴式住居跡が調査されている。

中上司遺跡は温江遺跡の南東に接して分布しており、扇状地上に位置する。この遺跡では、古墳時代中期後半の竪穴式住居跡3基、後期後葉～末頃の竪穴式住居跡6基、平安時代後期頃の掘立柱建物跡2棟が検出されている。この遺跡の周辺には前・中期の古墳が密集する位置にあり、同時期の集落跡が確認できたことは重要である。

裏ノ谷遺跡では、発掘調査により遺構は確認されていないが、弥生時代中期末～中世にいたる遺物が確認されている。弥生時代の遺物には、中期末頃、後期後半頃のものがあり、古墳時代の土器には、後期後半頃のものがある。

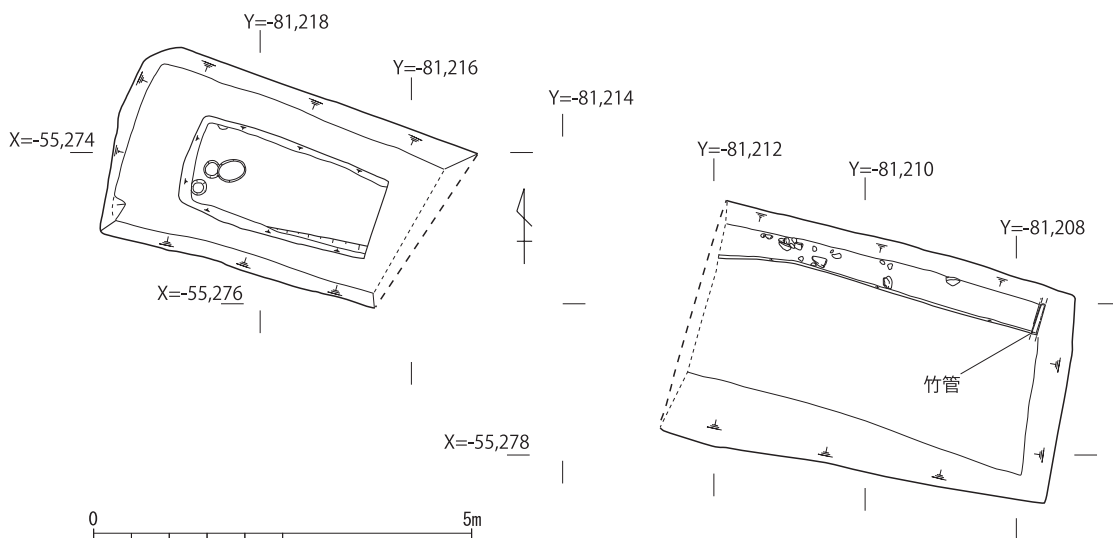
このほか、火口遺跡では、時期不明の溝・ピットを検出している。調査により、古墳時代～中世の遺物が出土しているが、弥生土器の散布地としても知られている。フカサ遺跡は古墳～平安時代、黒谷遺跡は弥生時代後期～平安時代の散布地として知られている。芦ノ谷遺跡では弥生土器・土師器、河ノ辺遺跡では弥生時代後期～古墳時代の遺物が確認されている。駒田遺跡は97年に調査されており、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、溝などと共に、弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代の遺物が出土している。井前遺跡では古墳時代前期～中期の土師器が出土している。

3. 検出遺構

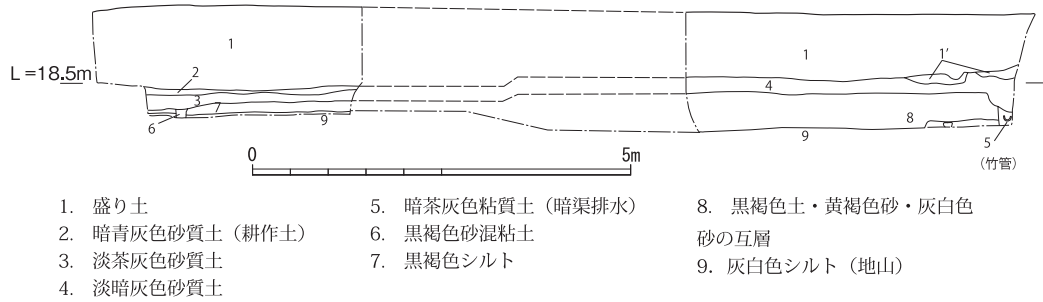
1) 1 トレンチ(第3・4図、図版第1～3)

4.5m×16mの範囲を対象に調査を実施した。この敷地は、現有道路面よりも0.6m程度高くなっており、旧地権者の方のお話しによると、現有の宅地を建設したときに盛り土を行って整地したとのことであった。

当初の計画では、まず西半を掘削し、東半に掘削土を置いて調査した後に東半を調査する計画とした。ところが、重機掘削の段階で、黄色砂を主体とする厚さ1.1mの盛り土層を確認した。予想以上の盛土であったため、当初に計画した範囲で排土が置けなくなり、予定面積の掘削を行えなかった。西半の調査地では、遺構状の小ピットを確認したため、西半を埋め戻し、東半を掘



第3図 1 トレンチ平面図



第4図 1トレンチ北壁土層図

削したところ、盛り土部分が水を含み、壁面が崩落しかけたため、急遽、土層の観察と記録を行った後に埋め戻しをおこなった。以上の理由のため、中央部分は未調査となった。西半の調査地が幅2.5m、長さ4.6m(下段が幅1.25m、長さ2.6m)、東半の調査地が幅3m、長さ4.8mで、間に約4.5mの長さの未調査部分がある。

東半の4層と西半の2層は、整地以前の旧耕作土である。3層は耕作に関連する整地層もしくは旧耕作土と判断されるものである。旧地表面に10~15cmの高低差が認められることから、未調査部分に田畑の段差があるものと想定される。トレンチの東端部分で、4層の下面から5層を埋土とする暗渠排水施設である竹管が埋設されていた。

東トレンチの8層と西トレンチの7層が対応する土層である。8層は黒褐色土・黄褐色砂・灰白色砂が縞状に水平となって互層に堆積しているもので、比較的流速の早い流水内で堆積した土層と判断される。7層は黒褐色シルト層で、3~7トレンチで認められる黒褐色土よりもやや色調が薄いもので、粘質も強く、粒子も細かいものであることから、流水内の堆積土と判断されるものである。7・8層の下には9層の灰白色シルトが堆積しており、東半ではその間に拳大の石礫が入り込んでいた。西半と比べて、堆積時の流速が早いためであろう。9層の地山の上面に高低差が認められることから、第4図にあるように、東側に下る流路状の地形が復原される。東半を埋め戻す際に重機で一部断ち割りを行ったが、十数センチ下げると灰白色の堅く締まった砂質となり、丘陵の基盤を形成する地盤層となる。

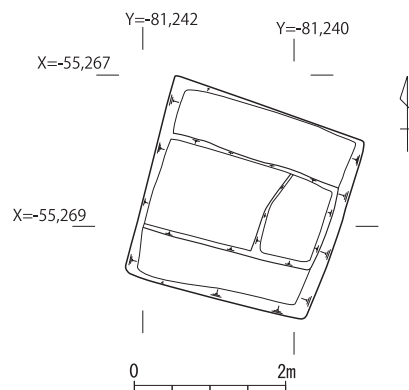
遺構としては西端で柱穴状のピットを3基検出した。土層で見ると7層の上面から掘り込まれている。検出した深さは10~15cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

出土遺物としては、7層中から古墳時代前期の土師器甕片が出土している。

2) 2トレンチ(第5・6図、図版第4)

この地点は民家の庭先にあたり、対象面積5m×9~12mの範囲にトレンチを設定した。まず、西半に2.5m×2.5mのトレンチを設定して調査を行った。

表土の碎石の下には、耕作土の淡茶灰色土があり、淡黄褐色土、黄褐色土、暗褐色土が堆積していた(第6図)。これらは耕作に伴う整地土層と判断される。2~4層は下層



第5図 2トレンチ平面図

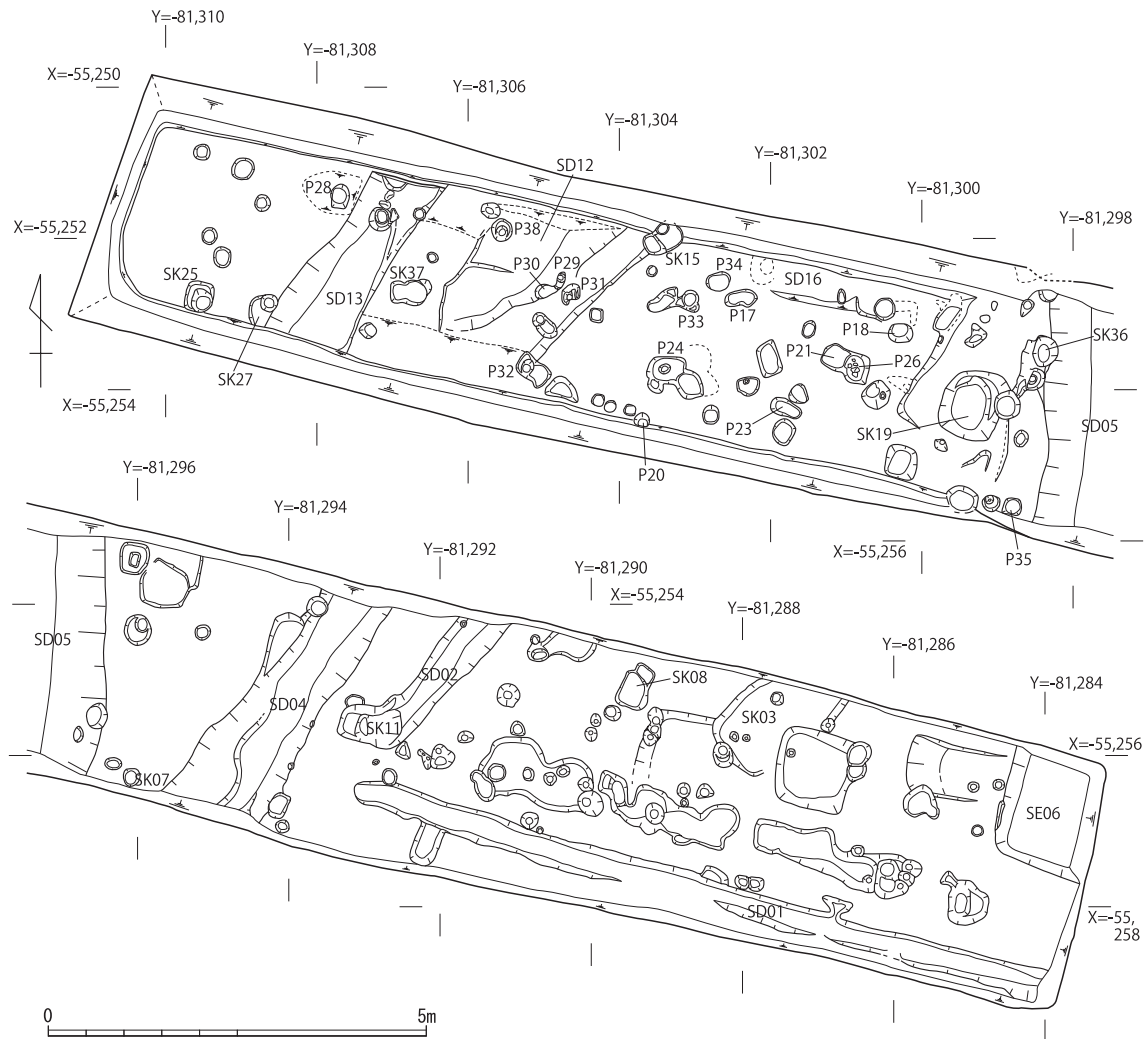
た。

遺構は地山面である17層および16層の上面で検出した。10層の黒褐色土中には弥生時代前期・古墳時代前期の土器片が混じり、いわゆる包含層であるが、同じ土がピットや溝などの遺構内を埋めているものがあり、その違いを認識することはできなかった。

なお、西半部の重機掘削時に、調査地内が水分を含みやや軟弱になっており、重機の重量により調査面に轍跡がついた。第8図にあるように、東西方向の2条の窪地状の溝が平行している。

検出した遺構には、大溝、溝、土坑、ピットがあるが、遺構の埋土は2種に分かれる。一つは黒褐色土を埋土とするもので、基本的に中央部やや東側で検出した溝SD02よりも西側で検出した遺構を埋めるものである。もう一つは、溝SD02よりも東側で検出した溝、土坑、ピットであり、黒褐色土に淡茶灰色土や淡灰色土が混じるものである。概して柔らかく、黒褐色土に混じる土砂が耕作土に近似することから、現代の耕作に伴う機械・人力の攪乱や溝・土坑と判断される（SE06、SK03、SD01～SK03・SE06の間の不定形の土坑）。これらの土坑・溝は、トレンチの中央部より西で、耕作土(1層)直下で確認された、底面の波打つ3・4層に対応する。

遺構の埋土は基本的に包含層と同じであり、7層の地山直上が遺構を検出した調査面である。



第8図 3トレンチ平面図

地山面の高さは、調査地北壁で見ると、調査地の東端から溝S D02までが標高約17.2mとほぼ水平であるのに対して、そこから西に下る。溝S D04の東肩が17.1m、溝S D05の東肩が標高16.9m、調査地の西端で標高16.8mである。溝S D02から西端までは約40cm低くなっており、溝S D02より東側では黒褐色土が堆積していないことを考慮すると、東半は数10cmの削平を受けたものと推定される。そのため、溝S D02よりも東側では、弥生時代前期から古墳時代前期に遡る遺構の数が、西半と較べて少ないのであろう。

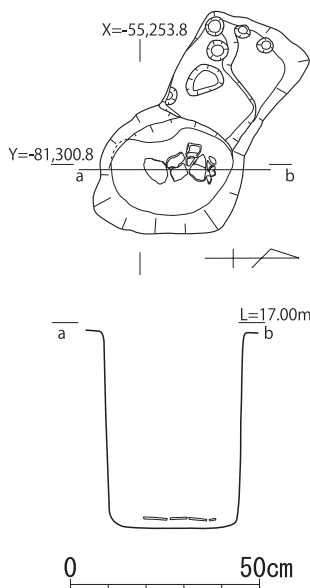
ピットを多数検出したが、掘立柱建物に復原できるものはなく、その性格は不明である。

溝S D01 (図版第5-(2)・6-(1)) 調査地の東南部で検出した溝で、現況の道路および田畑の区画に平行する。内部からは現代の土器片等が出土し、田畑に伴う区画溝と判断される。検出長は9.4m、幅30~40cm、検出した深さは15cmである。底面は東から西に下る傾斜をもつ。この溝の北側に平行して不定形な土坑・溝の連なりを検出している。底面は凸凹であり、小ピット状の窪みも認められる。現代の耕作に伴う溝・土坑と判断される(図版第5-(2)・6-(1))。

土坑S K03 (図版第9-(1)) 東半部北辺で検出した土坑で、北半部は調査地外に延びる。埋土は淡茶褐色混黒褐色土で、耕作土と黒褐色土が混じったものである。1層の耕作土が混じり込んでいることから現代のものと判断する。長さ1.65m、幅1.1m、深さ15~25cmである。南東部に一辺1.05m、深さ約20cmの方形の土坑が重複している。埋土が耕作土とほぼ同じであることから、現代のものと判断される。

井戸S E06 調査地の東北隅で検出した土坑で、西南隅を検出した。ほぼ直角を呈しており、野井戸状を呈する。西辺1.5m以上、南辺1.3m以上を検出し、深さ約60cmである。内部から、棧瓦が出土している。

溝S D02 調査地の東半、トレンチの中央付近から北側で検出した溝で、現在の道路にほぼ直交する方向にある。溝底はほぼ水平であるが、南端に土坑S K11があるため、端部の状況はよくわからないが、浅くなって終わっている。遺構検出面の地形は、北東から南西にやや下る傾斜面をなしているため、トレンチの中央で終了している点から、自然の溝とは考えにくいものである。検出長は2.4mで北に延びる。溝幅は40~60cmで、深さは最大で20cmである。埋土は黒褐色土である。内部から土師器片と判断される土器片が出土している。

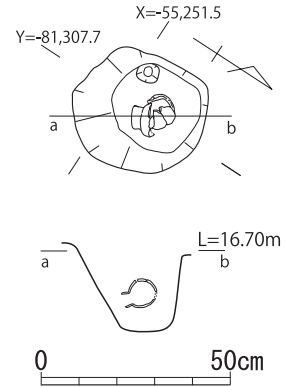


第9図 3トレンチ
ピットP26実測図

溝S D04 (図版第6-(2)・7-(1)) 中央部やや東で検出した溝で、幅0.85~1.3m、深さ40~50cmである。北から南に下る傾斜を有する。溝S D02と同じく、現在の道路面にほぼ直交する方向を有する。埋土は黒褐色土で、土師器片が出土している。

溝S D05 (図版第6-(2)・7) トレンチのほぼ中央で、ほぼ南北に掘削された溝である。溝の規模は、幅約1.85~2.0m、深さ1.1~1.2mと大きなもので、溝の断面形状は「V」字形となる。内部から弥

生時代前期の土器が出土した。遺構面は北東から南西方向に下る地形であり、ほぼ南北にあることから、人工的に掘削されたものと判断される。7トレンチで検出した溝S D02とはほぼ同規模で、同時期の遺物を含むこと、後述のように、両溝間に同時期の遺構が分布することから、弥生時代前期の集落の周囲を巡る環濠と判断される。埋土の堆積を3層確認したが、ほぼ水平な堆積で、土塁状の盛り土が流入した形跡は確認できなかった。弥生時代前期の土器が出土しているが、第7図にあるように、中央よりも西肩に近い位置で出土しており、西側から入り込んだ状況である。遺物の出土量は、7トレンチ溝S D02と較べて少なく、1箱程度である。第25図3～9の壺・甕が出土した。



第10図 3トレンチ
ピットP28実測図

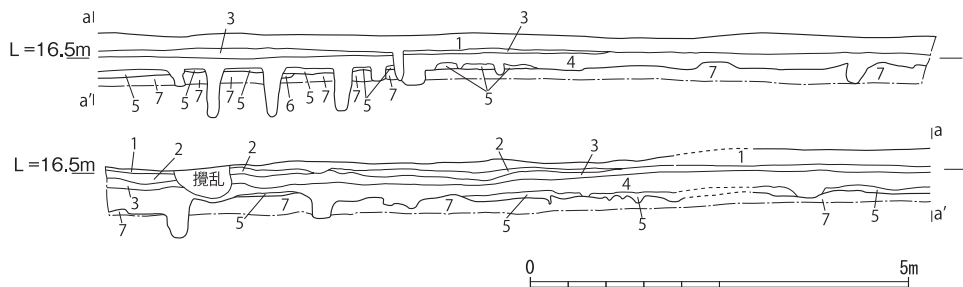
溝S D12 トレンチの西半で検出した溝で、北東から南西に向けて検出した。幅1.6～1.8mで、東肩部は深さ約30cmで、二段の掘形となって、ほぼ直線的であるが、西肩は浅く10cm未満で、不定形である。南端部は重機の轍跡によって検出できなかった。溝底は南から北に向けて下る。埋土は黒褐色土で、第25図18の高杯脚柱部、19の鉢が出土している。古墳時代前期。

溝S D13 調査トレンチの西端で検出した南北溝で、幅0.8～1.1m、北壁際は深さ10cm程度と浅く、南端が最大で約30cmである。北東から南西に下る。第25図13の甕片が出土した。弥生時代後期のものと判断される。

土坑S K19 溝S D05の西側で検出した大形の土坑で、0.8×0.9mのほぼ方形を呈する土坑である。検出高は85cmと深く、内部から第25図12の弥生時代後期の甕が出土した。

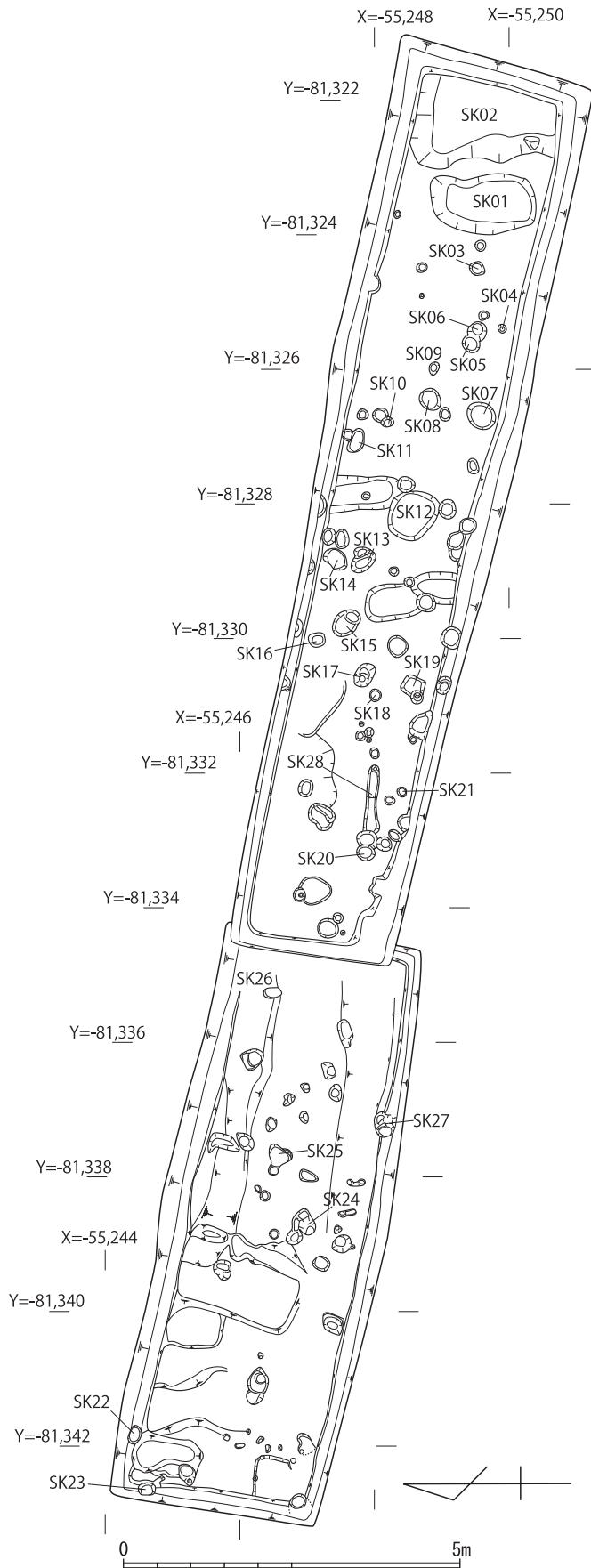
ピットP26 (第9図、図版第9-(2)) 溝S D05の西側で検出したピットで、ピットS P21と重複関係を有するが、遺構の切り合い関係からの先後関係は確認できなかった。一辺35cmの隅丸方形を呈し、検出した深さは63cmである。ピットの壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、底面より数cm程度浮いた状態で、高杯の杯身部分が出土した(第25図17)。底面近くからまとまって出土したことから意図的に埋納したものと推定されるが、検出時には元の形を保っていないことから、当初から破片となっていたようである。古墳時代前期。

ピットP28 (第10図、図版第9-(3)) トレンチの西端で検出したピットで、直径30cmの円形を呈し、検出した深さは最大で30cmである。ピットのほぼ中央、底部から約10cm浮いた状態で、第



- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1. 暗灰色砂質土 (耕作土) | 4. 黒褐色土 | 6. 黒褐色土 (4より黒い) |
| 2. 茶灰色土 (耕作土) | 5. 黒褐色斑混淡黄灰色粘質土 | 7. 黄褐色粘質土 (地山) |
| 3. 淡茶灰色土 (床土) | | |

第11図 4トレンチ北壁土層図



第12図 4トレンチ平面図

25図14の小型丸底壺が口縁を横にして、土圧により割れてはいたが、ほぼ完形の状態出土した。この上位より、15の小型丸底壺が出土している。古墳時代前期。

この他、P35、SK37より弥生時代前期の土器片が出土したが、それ以外の遺構番号を付したものは土器小片が出土しているが、時期は不明である

4) 4トレンチ (第11・12図、図版第10・11)

東半の2.5~2.9×13.5mの調査トレンチを調査した後、西半の3×8.5mの調査を実施した。耕作土の下には3層の床土があり、その下位には厚さ15~30cmの黒褐色土の包含層が全面に認められた。遺構の埋土もまた黒褐色土であり、トレンチ壁面の土層を観察しても、遺構と包含層の黒褐色土を区別できなかった。西半部の調査地は、重機で表土掘削を行った際に、地盤が水分を多く含んでおり、重機の重量により地盤が窪み、トレンチの北壁と南壁近くに2条の轍が溝状についた。また、地山が水分を多量に含んで粘度を増したため、バックホーによる掘削作業がうまくできずに、10~15cm程度、7層の地山を掘り過ぎてしまった。そのためか、東半と較べて遺構の検出密度が少ない。土層の観察では、包含層がほぼ同じ厚さで、トレンチの東端から西端まで分布してい

るので、地形の改変による削平は受けていないものと思われる。

土坑SK01 調査地の東端で検出した土坑である。長さ1.55m、幅0.9m、検出した深さは50cmである。内部から棧瓦が出土している。

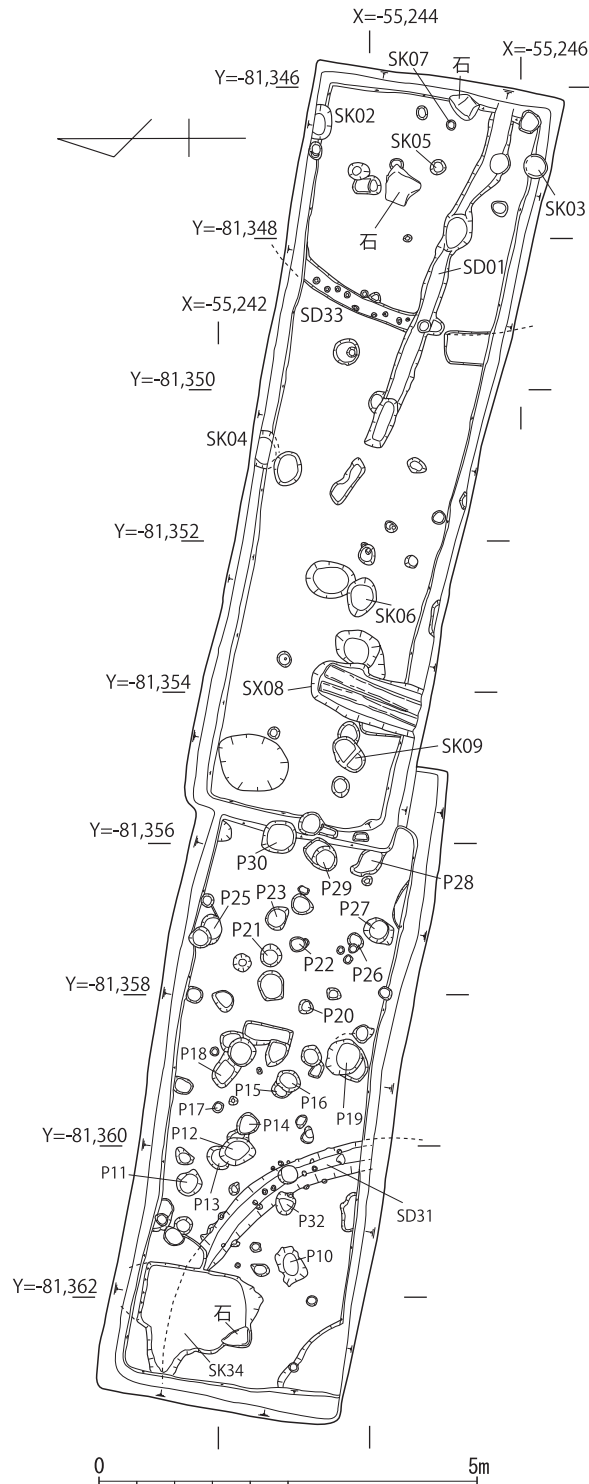
東半を中心に、多くのピット・土坑を検出したが、掘立柱建物等に復原できるものはない。ただ、掘削深が65cmと深いものもあり、概して遺構の残り具合は良いものである。出土した遺物は小片のものが多く時期の決め手に欠く。弥生時代前期の土器は、土坑SK07からは甕(第26図22)、SK10からは壺(同20)、そのほかSK06から小片が出土した。弥生時代後期の土器は、土坑SK27からは甕(第26図27)、SK12・20・23からは小片、古墳時代前期の土器は、土坑SK19から甕(第26図28)、SK09からは土師器小片が出土している。

土坑SK02 調査地の東端で検出した土坑で、東半は調査地外である。1.6m以上×2.2m以上、検出高は25cmである。内部から棧瓦が出土している。

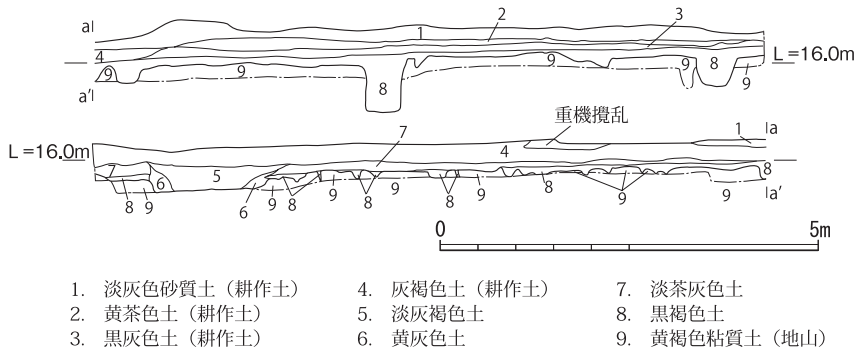
5) 5 トレンチ(第13~17図、図版第12~15)

2枚の田畑をまたいでトレンチを設定した。東側の畑の耕作面は西側に比べて約30cm程度、高い位置にある。排土置き場の関係より、東半の一段高い畑部分3~3.3×10.1mを調査した後、西半の一段低い畑部分3.3×8~8.8mの調査を実施した。

東半は1~3層が畑に伴う耕作土であり、耕作土を除去すると8層の黒灰色土層が5~10cmの厚さで堆積しており、これを除去すると、9層の黄褐色粘質土(地山)となる(第14図)。西半は4層の耕作土の下に7層の淡灰色土が床土としてあり、その下面に厚さ数~15cm程度の黒灰色土があり、その下位が黄褐色粘質土の地山となる。地山面上で溝・土坑・ピットを検出したが、基本的には8層と同じ黒褐色土が埋土となっていた。



第13図 5 トレンチ平面図

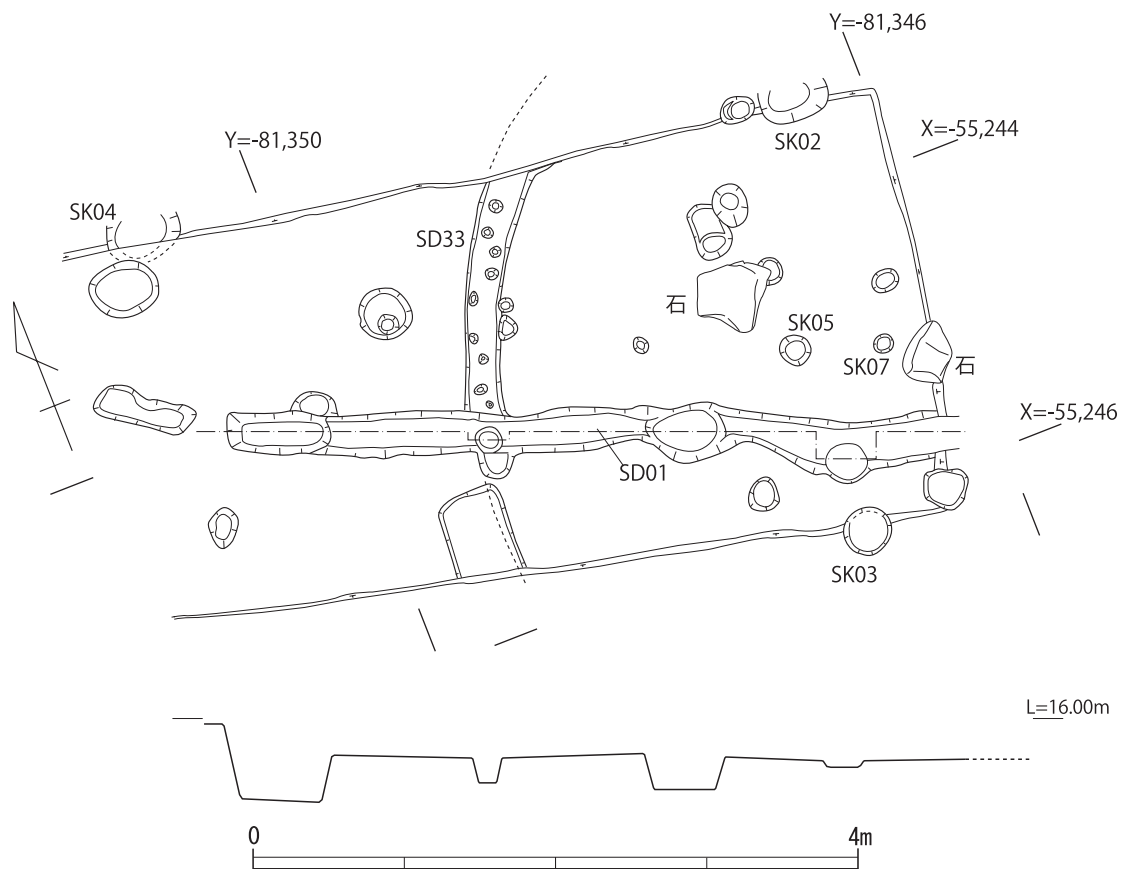


第14図 5トレンチ北壁土層図

古墳時代前期の弧状に巡る溝、古墳時代の布掘り状の柱穴列、時期不明の弧状に巡る溝、多数のピット・土坑を検出した。

溝 S D01 (第15図、図版第12-(2)・14-(1)) トレンチの東端で検出した溝で、トレンチの方向にほぼ平行し、東端は調査地外に延びる。幅30cmで、深さ25cm程度、総長4.9mにわたって検出した。西端部と中央部に、長さ70cm、55cmにわたって、溝底から30cm、20~25cmの深さの土坑が溝幅分に掘られていた。土坑の間は心々で2.7m離れる。検出面からは最大で50数cmの深さに達する深いものである。土坑部分の土層断面を観察したが、溝内および土坑内には黒褐色土の堆積だけが認識でき、柱掘形や柱抜き取り痕、溝と土坑の重複関係などは確認できなかった。溝と土坑がほぼ重なっていることから、溝と土坑は同一の構造物であると判断する。これらの土坑は、特に西端のものは柱掘形としてはやや細長い形状を呈している。柵もしくは掘立柱建物であろうか。この場合、柱と柱の間の溝には板状のものを立て並べたと判断される。この遺構面は、後述のように、竪穴式

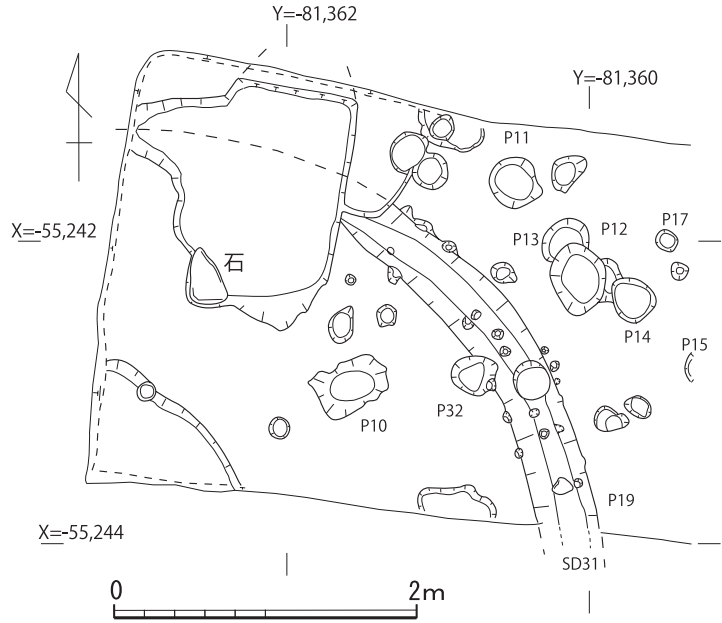
溝 S D01 (第15図、



第15図 5トレンチ溝 S D01・33実測図

住居の竪穴の高さ分の削平があったと考えられる。そうすると、溝SD01の最深部の検出高が55cmあるので、溝SD01の元々の掘削深度は最低でも1mを超えることとなる。土師器小片が出土している。

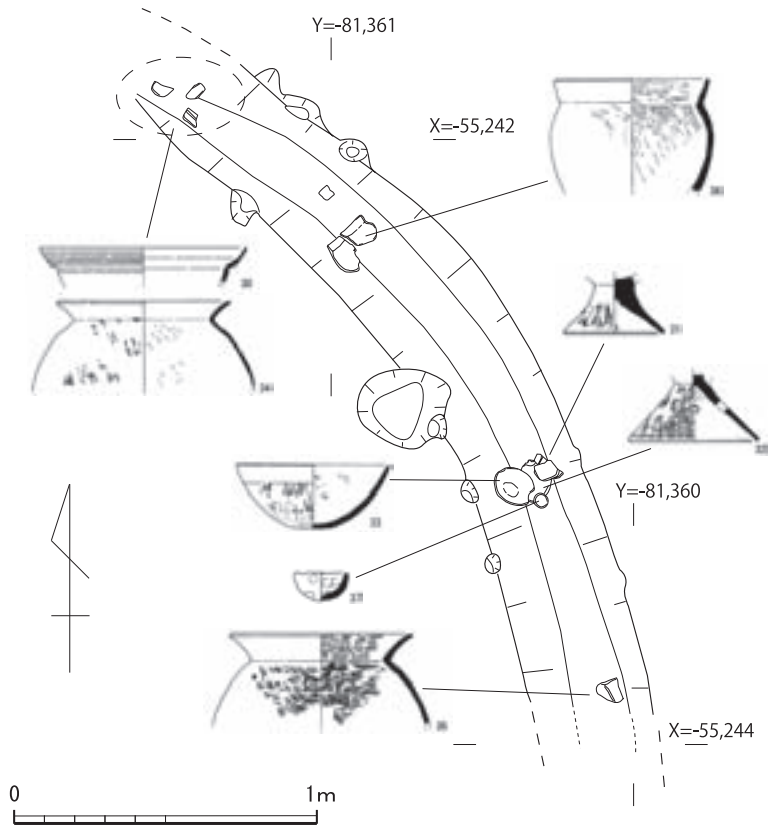
溝SD31(第16・17図、図版第13-(2)・14-(2)・15-(1)) トレンチの西端で検出した溝で、円弧を描く。幅約35~40cmで、検出高20~25cmである。底面には小ピットが穿たれていた。総長2.8mにわたって検出した。西半部は現代の土坑SK34により攪乱を受けてい



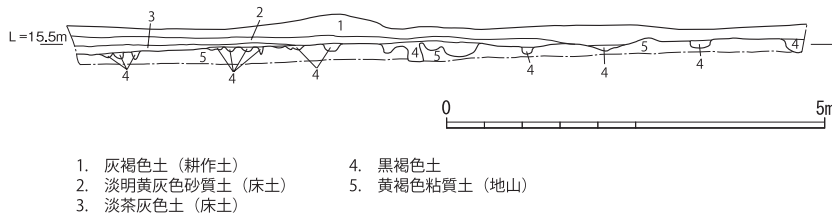
第16図 5トレンチ溝SD31実測図

た。トレンチの西壁に溝SD31の埋土が観察できたため、調査地外に延びることが確認できた。径約6mに復原できる。また、弧状に巡る溝の内側から、25cm×40cmの三角形を呈した黄色の砂岩系統の平たい石が、半ば地山に埋もれていた。溝内からは第26図30~37の土師器甕・碗・高杯が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。

溝SD33(第15図、図版第12-(2)・15-(1)) トレンチの東辺近くで検出した溝で、溝SD01と重複関係にあるが、先後関係は不明である。幅20~25cm、深さは数~10cmで、約2.2mにわたって検出した。溝は北で東にやや湾曲しており、南から北に向けてわずかに深くなる。北壁の土層断面では幅約60cm、深さ約10cmと幅広の浅いもので、その中の深い部分が平面的に検出されたものである。溝の底面には、径10cm未満、深さ5~10cm程度の杭状の小ピットが穿たれていた。小ピットは溝の南側



第17図 5トレンチ溝SD31遺物出土状況実測図



第18図 6トレンチ北壁土層図

延長ライン上では検出できなかったが、溝底は南に向けて浅くなるため、南側の小ピットは削平により消失してしまったのであろう。

円形に巡るとすると、直径約6mに復原できる。また、溝SD01と同様、溝SD33の東側1.6mと2.9mの位置には、平らな石が座っていた。溝内からの遺物は出土しなかった。

土坑SX08 (図版第15-(3)) トレンチ中央部南半で検出した土坑である。内部には、針金で結ばれた丸太2本が埋め置かれており、針金が上方に向けて延びていた。地元の方の話によると、近辺に鉄塔があったとのことであり、鉄塔もしくは電柱を張るための重しと判断される。

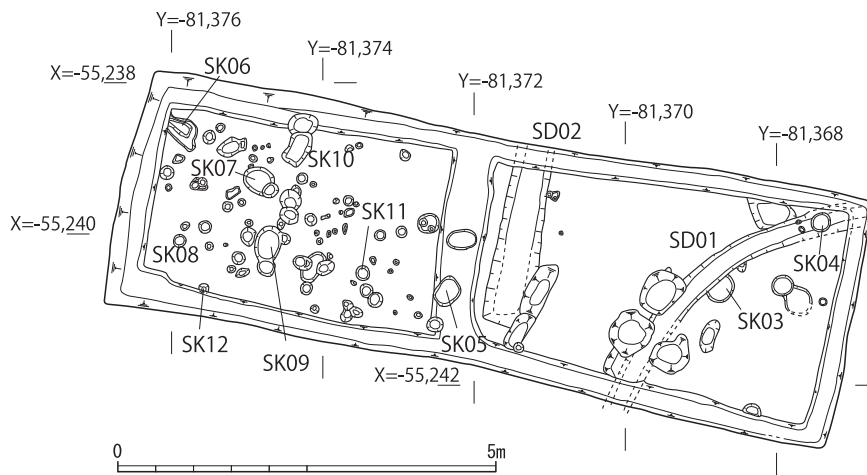
土坑SK34 トレンチの北西端で検出した土坑で、調査地外に延びる。北壁土層に見るように、耕作土直下から掘り込まれたもの(第14図5・6層)で、現代のものと判断される。

このほか、出土遺物の図化はできないが、弥生時代前期の遺構としてP30・27、弥生時代後期の遺構としてSK05(第26図38の壺)・P25、古墳時代前期の遺構としてSK02・P14・P17・P10がある。古墳時代後期の土坑SK06からは須恵器杯蓋の天井部の破片が出土している。また、P19からは縄文土器片(第26図41)が出土している。

6) 6トレンチ(第18~20図、図版第16・17)

まず東半の調査をしたの後、西半部の調査を実施した。東半の掘削土・排土は西半部に仮置きし、西半の調査時には東半の調査区を埋める予定であったが、後述のように、表土直下が遺構面であり、予想以上に土量が少なかったため、すべての土砂を7トレンチの西半部に移動して、調査を実施した。トレンチは幅3~3.3m、長さ9.8mである。

耕作土・床土(1~3層)を約15~25cmを除去すると、黄褐色粘質土の地山となり、他の調査区で認められているような黒褐色土の包含層は認められなかった(第18図)。しかし、一部の遺構

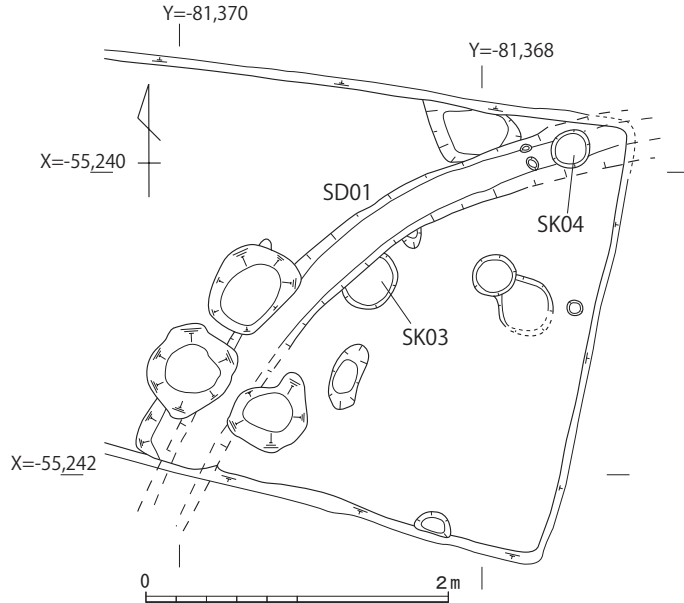


第19図 6トレンチ平面図

には黒褐色土が入り込んでいるので、田畑の造作時に削平を受けて、包含層は消失したものと判断される。遺構を検出したのは標高15.4~15.6m付近で、床土・耕作土中には弥生時代前期~古

墳時代の土器片が混じっている。

弥生～古墳時代と判断される遺構は少なく、東半では溝 S D01とこの溝の東側のピット群、溝 S D02である。また、西半部では多くの遺構を検出しているが、これらは底が丸くて浅い小ピットが中心で、黒褐色土をベースとしながらも耕作土である灰褐色土が混じり込んでいるものもあることから、耕作に伴う鋤や杭の跡と判断される。ただし、土坑 S K 07・09・10の南北にやや大振りの土坑を数基検出しているが、これらの



第20図 6トレンチ溝 S D01実測図

検出高も15～40cmと深く、掘り方はしっかりしており、今回の調査で確認されている弥生～古墳時代の遺構と判断される。それ以外のピットからは、遺物の出土を見たものもあるが、基本的に現代のものと判断される。

時期不明の竪穴式住居跡1棟、溝を検出した。

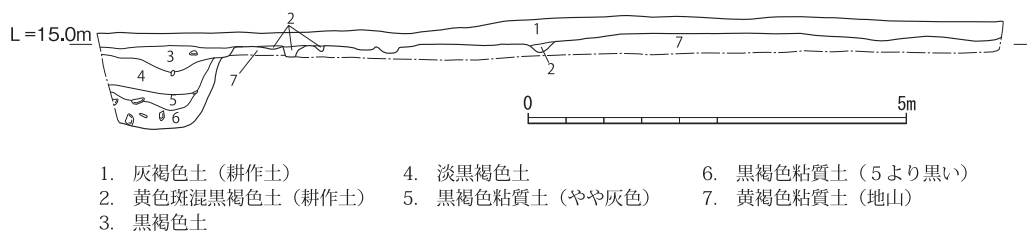
溝 S D01 (第20図、図版第17-(2)) 調査地の東側で検出した円弧をなす溝で、南東部は現代の攪乱により削平を受けている。幅25～30cm、深さ約10cmで、約3.8mにわたって検出した。復原すると径7m程度の規模となる。埋土から弥生時代前期の甕片(第26図42)とともに、受け口状を呈した土師器甕の口縁が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。土坑 S K 03・04との重複関係は不明であるが、土坑 S K 04からは弥生時代後期の甕片(第26図43)が出土している。

溝 S D02 調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝で、2.3mにわたって検出した。溝幅50～60cm、検出高は最大で15cmと浅いものである。南端は急に浅くなって終わっており、底面はほぼ水平をなしている。その形状より、人工のものと判断される。埋土より、須恵器小片、埴輪片(第26図45)、土師器高杯脚柱部(44)が出土している。

このほか、土坑 S K 05・10からは土師器と判断される土器小片が出土している。

7) 7トレンチ(第21・22図、図版第18～21)

13×5mの調査範囲のうち、まず、東半部に幅2.8～3.2m、長さ7mの調査地を設け、調査終



- | | | |
|------------------|-----------------|------------------|
| 1. 灰褐色土(耕作土) | 4. 淡黒褐色土 | 6. 黒褐色粘質土(5より黒い) |
| 2. 黄色斑混黒褐色土(耕作土) | 5. 黒褐色粘質土(やや灰色) | 7. 黄褐色粘質土(地山) |
| 3. 黒褐色土 | | |

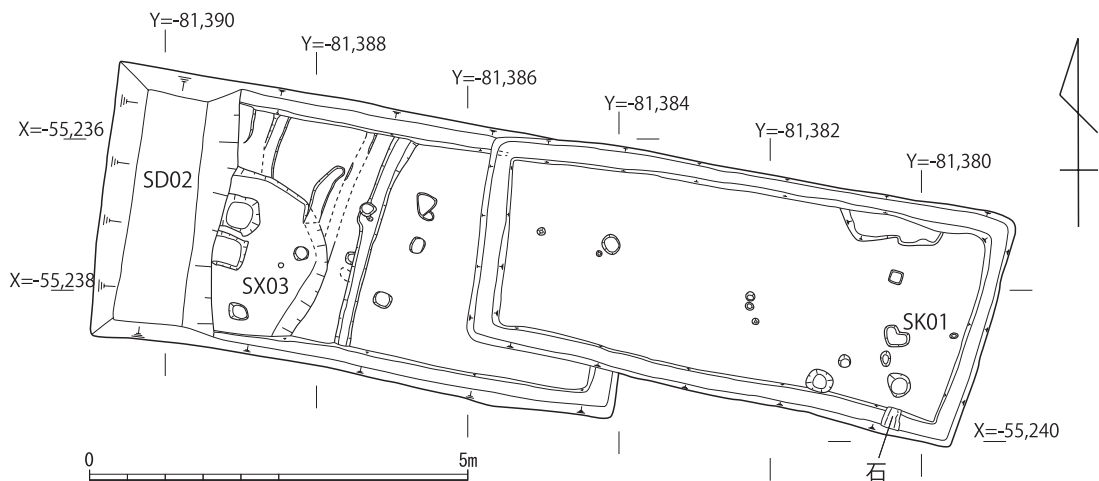
第21図 7トレンチ北壁土層図

了後に西半部に幅3.6m、長さ5mのトレンチを設けて調査を行った。土層は、基本的に耕作土(灰褐色土)の下には7層の黄褐色粘質土があり、地山である(第21図)。6トレンチ以東で確認される黒褐色土の包含層は認められなかったが、遺構検出面が標高14.95~15.05mであり、東側の6トレンチの西端の地山高の標高15.5mと較べて約50cmの高低差があることから、本来は包含層が堆積していたのが、後世の削平のために消失したと判断される。実際、現在の地表面は、田畑の段差により45cm程度の比高差が認められる。

地山直上での精査により、耕作に伴うと判断される小ピット、小溝を多数検出した。これらは、黄褐色混黒褐色土を埋土とするが、耕作土の灰褐色土を主体するものもあり、現代の耕作に伴う溝・小ピットと判断した。部分的に黒褐色土を埋土とするものがあり、調査地の東南部で検出した土坑S K01をはじめとするピット群、西側約4mで検出したピット、西辺で検出した溝S D02、土坑S X03とともに、これらは弥生時代~古墳時代に遡るものと判断される。なお、東トレンチを埋め戻し、西トレンチを掘削する際に、地山が水分を含み軟弱となり、バックホーの自重のため、遺構面に轍跡がついた(図版第18-(2))。

小溝群(図版第18-(1)) トレンチの西端、溝S D02の東側で検出した。北北東から南南西に掘削されており、幅15~20cm、深さ10cm内外の溝である。埋土は黄褐色斑混黒褐色土で、耕作土の灰褐色土が混じっており、現代の耕作に伴う溝群と判断するものである。

溝S D02(図版第19・20・21-(1)) トレンチの西辺で検出した南北方向の溝で、西辺は調査地外のため、幅は不明である。遺構面の傾斜と異なる方位を有することから、人工的に掘削された溝と判断される。検出した長さ3.2m、幅は1.6m以上、深さ1.1mを測る。溝底はほぼ水平で、南北3mの間で北側が数cm低くなる。土坑S X03と重複関係を有しているが、共に黒褐色土を埋土としており、先後関係を確定することはできなかった。検出面より25cm程度下面、4層上半で多数の土器片(第27~32図)、石礫が出土した。土器片は東側がやや高い位置にあり、集落側と判断される東側から投棄された状況で出土している。完形に近い土器が土圧で潰れた状態で出土しているものもある(図版第20-(3))が、洗浄後に接合しても、完形近くに接合できるものは少



第22図 7トレンチ平面図

なかった。このことから、完形に近い土器を廃棄したのではなく、主として破片になった土器を廃棄したものと推測される。人面付き土器(第33図)は、多数の弥生時代前期の土器片に混じって、この大溝から出土した。土層を見ると、第6層が東肩からの流入土とも判断されるが、この土層だけでは、土壘等が東側に盛られていたのかどうかは判然としない。

この大溝は、3トレンチの大溝と対になり、集落をめぐる西側の環濠になるものと推定される。

土坑S X03(図版第21-(2)) 溝S D02と重複しているが、埋土には溝S D02と同じく、黒褐色土が入り込んでおり、その重複の先後関係はわからなかった。2m以上×1.8mの平面規模で、検出高は最大で約30cmである。平面形は隅丸の方形を呈し、横断面で見ると、土坑の中央が最も深く、底面からゆるやかに10~15cm立ち上がりつつ壁面に至る。底面の北辺近くでは2基の土坑を検出した。それぞれ、径約45cmで、深さ15~20cmである。内部からは時期の特定できる遺物は出土しなかった。土坑S X03の周囲にはピットや土坑が数基しか検出されていないことから、多くのは削平を受けたと思われ、他のピット・土坑が削平を受けても消失しない程度の深さで掘削されていたと判断される。その形状および規模、底面に土坑などが穿たれていることから、竪穴式住居の残欠と推定する。

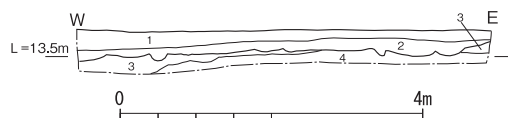
8) 8トレンチ(第23・24図、図版第22)

調査対象地の東半に、2.6×5.7mの調査区を設定して調査を行った。耕作土(暗茶灰色粘質土)の下には整地土層と判断される暗茶灰色砂混土が堆積しており、その下が淡黄灰色砂・淡明青白色砂質土の地山となる。地山面で小ピット、溝などを検出したが、2層の暗茶灰色砂混土を埋土とする溝・小ピット、1層の耕作土を埋土とするピットのみで、他のトレンチで検出したような黒褐色土を埋土とするようなものはなく、現代に近い時期の遺構と判断された。また、1~7トレンチで確認された黒褐色土の包含層も確認できなかった。

遺構を検出した地山面の標高は、13.55~13.4mで、東から西に傾斜する。

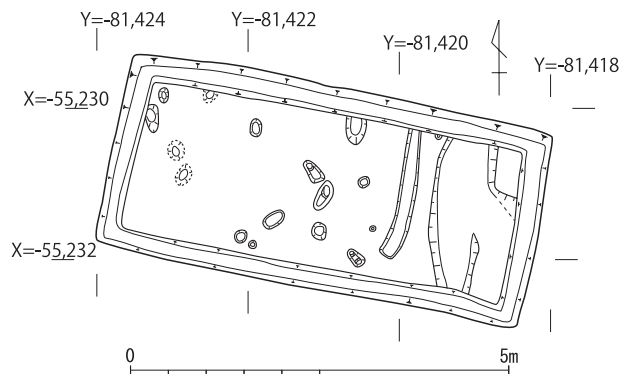
このように、顕著な遺構がなかったため、西半部の調査は行わなかった。

8トレンチの東側には、比高差約1mの崖面があり、この崖面を形成する際に遺構面は削平を受けたものと思われる。8トレンチの東側の崖面は、現地表面を観察すると北・南に連なり、特に北に延びる崖面は、蛭子山古墳や作山古墳の丘陵裾まで追えるものである。また、8トレンチの西側の道路の西には水路があることから、本来この位置に段丘崖面が形成されていたと判断された。そのため、



1. 暗茶灰色粘質土(耕作土) 3. 淡黄灰色砂(礫混:地山)
2. 暗茶灰色砂混土 4. 淡明青白色粘質土(地山)

第23図 8トレンチ北壁土層図



第24図 8トレンチ平面図

温江遺跡の範囲も8トレンチよりも東側の丘陵上に限られるものと想定されていた。

今回の8トレンチの調査により、東側の崖が後世の削平によるものと判断され、丘陵を形成する地山が8トレンチの位置にまで広がっていることを確認できたことから、温江遺跡が載る丘陵はさらに西側に延びていたと判断される。

4. 出土遺物(第25～34図、図版第23～30)

調査により、1・8トレンチからの遺物の出土は見なかったが、2～7トレンチでは、弥生時代前期・後期、古墳時代前期の土器片が出土している。また、6トレンチでは、埴輪片および須恵器片がわずかに出土した。近現代の遺物は、3～5トレンチで出土したが、古墳時代後期～近世にいたる遺物は全く出土していない。遺物の総量はコンテナ25箱である。

特に多くの遺物が出土したのが7トレンチの溝SD02である。この溝は先述のように、環濠集落の西辺を画する溝と判断されるものである。東側から廃棄された状態で出土しており、4層に集中して出土したもので、一括性が高いものと思われる。

以下、2～6トレンチから出土した遺物と7トレンチのSD02から出土した遺物を項を分けて報告する。2～6トレンチから出土した遺物は小片が多く、図化できたものは少ない。

1) 土器・土製品(第25～33図、巻頭図版、図版第23～30)

(1) 2～6トレンチ(第25・26図、図版第23・24)

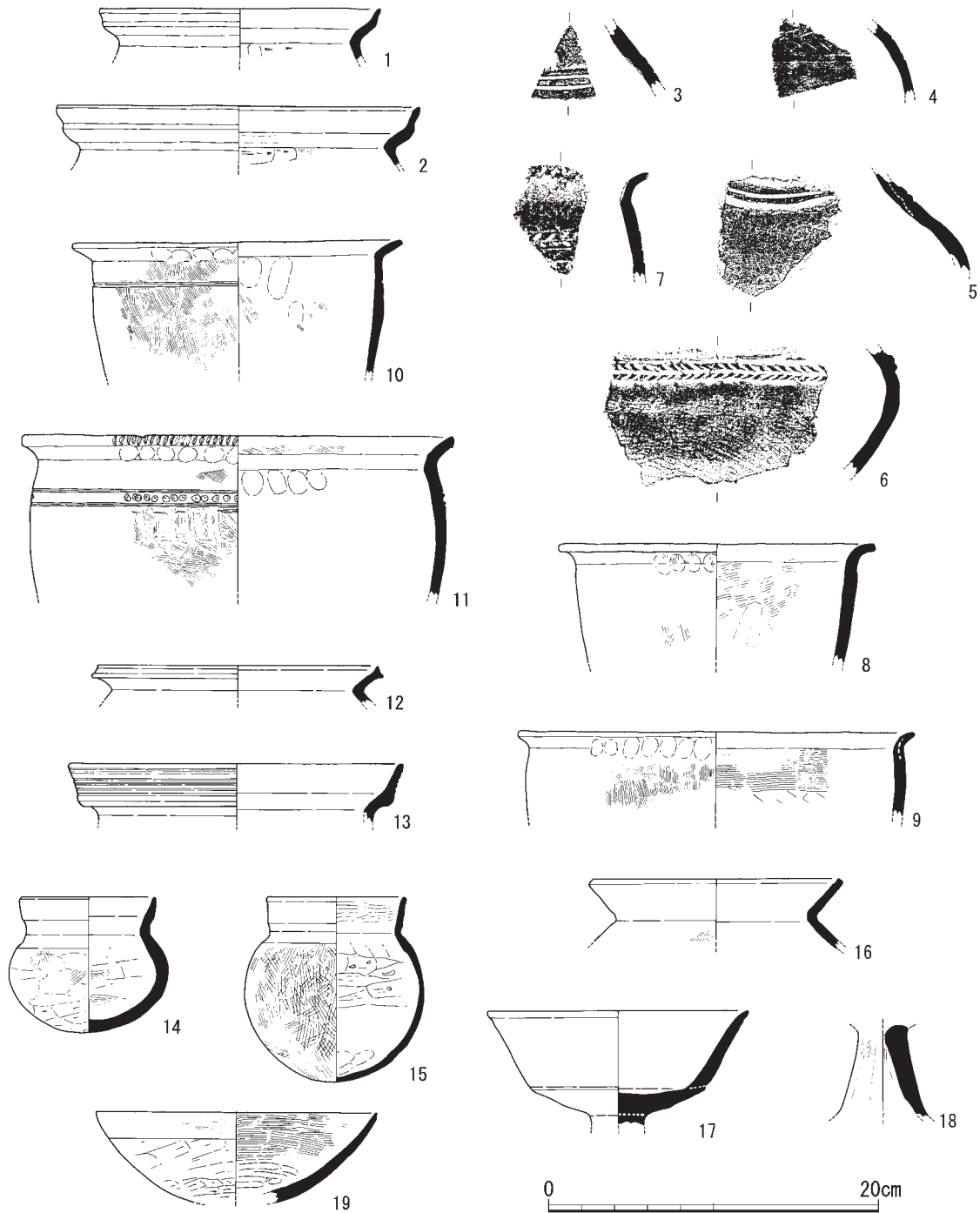
第25図1・2は2トレンチの黒褐色土から出土した甕である。ともに、「く」の字に屈曲する頸部から斜め上方に広がりつつ立ち上がり、さらに上方に屈曲し、受け口状の口縁を有する。口縁下部には幅広の平坦面を有し、強くナデられている。1は小片であるが、口径17.0cm(復原)、器高3.1cm(現存)、2は口径22.0cm(復原)、器高3.6cm(現存)である。ともに古墳時代前期のものである。

3～19は3トレンチから出土した遺物である。3～11が弥生時代前期、12・13が弥生時代後期、14～19が古墳時代前期のものである。

3～9はSD05から出土した弥生土器である。この溝は、環濠集落の東辺の溝と判断しており、7トレンチ溝SD02と対になるものである。7トレンチSD02と異なり、遺物の出土量は少ない。3・5は壺の頸部から胴部にかけての破片で、削り出された突帯の上にヘラ描き沈線が巡る。4は壺の肩部の破片で、貝殻羽状文の下にヘラ描き沈線3条が施される。6は壺の腹部の破片で、貼り付け突帯の上にヘラ状のもので綾杉文が刻まれている。7は甕の破片で、口縁端面に刻み目が施され、口縁下に横方向のヘラ描き沈線が3条あり、上2条の沈線の間と最下段の沈線の下には貝殻羽状文が刻まれている。8・9は口縁部が短く外反する甕である。

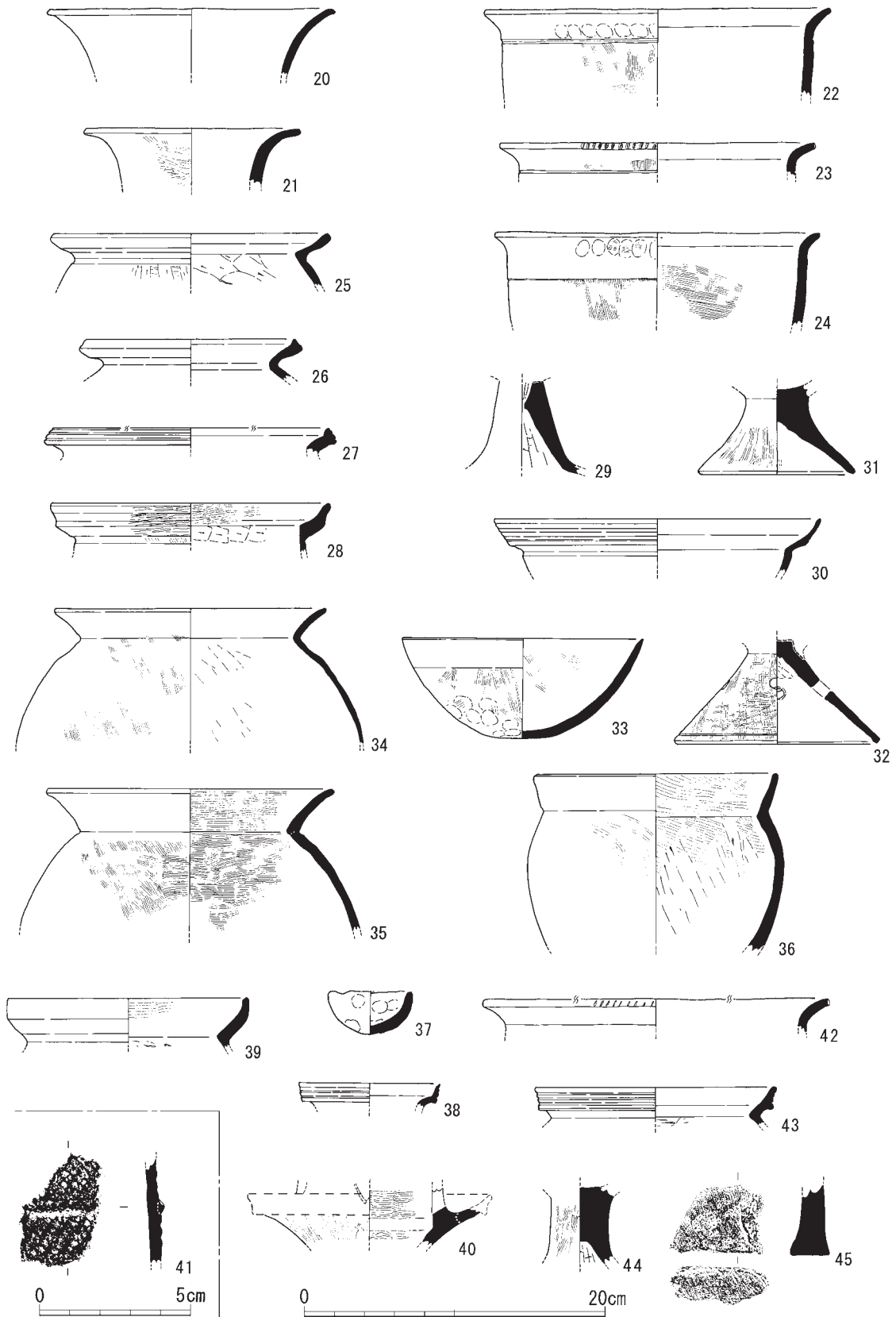
10の甕はP32より出土した。頸部に1条のヘラ描き沈線が巡る。11は甕で、頸胴界に2条のヘラ描き沈線文を施し、その間に竹管文を入れる(図版29)。包含層中から出土した。12の甕は土坑SK19、13の甕はSD13から出土した。

14・15の小型丸底壺はともにP28から出土した。出土状況とその遺存率の高さから一括性の高



第25図 出土遺物実測図 土器1(2~3トレンチ)

いものである。14は口縁部をほぼ1/2欠くものの、体部はほぼ完存するものである。口径8.0cm、器高8.2cm。15は口径8.3cm、器高11.2cmで、全体のほぼ2/3が残存している。外面には細かなタテハケで、内面は横方向にヘラ削りを行っている。16の古墳時代前期の土師器甕はトレンチ東側の小ピット群から出土した。17の高杯杯部はP26の底面近くに埋め置かれていたもので、脚部はないが、杯部のほぼ2/3が遺存している。口径は復原で15.8cm、器高は現存で7.0cmを測る。18・19はともにSD12より出土した。18は高杯脚部で、杯部および脚部底部は遺存していない。外面



第26図 出土遺物実測図 土器2(4~6トレンチ)

の一部にミガキが見て取れる。19の鉢は口径17.0cm(復原)、器高5.5cm(現存)である。33とよく似る器形を有する。古墳時代前期のものであろう。

第26図20～29は4トレンチから出土した。20～24が弥生時代前期、25～27が弥生時代後期、28・29が古墳時代前期のものである。20・21は広口壺の口縁で、20は土坑S K10、21は包含層中から出土した。22～24は甕である。24はハケの削り出しによる段をもつ。22はS K07、23・24はS K06から出土した。25はS K22、26は包含層中から、27はS K27、28はS K19から出土した。

第26図30～41は5トレンチから出土した。30～37の土師器はS D31から出土したもので、30は弥生時代後期の高杯と考えられる破片で、混じり込みと判断されるが、他のものは一括性の高い一群である。30は段を有して上方に大きく開く口縁を有するもので、外面に擬凹線が施されている。31・32は土師器高杯脚部で、ともに杯部はない。31は外面に細かな縦方向のハケメが施されている。底径の約1/4、脚部全体の約1/2が遺存している。底径10.2cm(復原)、器高5.9cm(現存)である。32は土師器高杯脚部で、杯部はないが、脚部はほぼ完存している。円形の透し穴が4方向に空けられており、外面は細かなハケメ、内面はナデている。底径の1/6を欠くものの脚部はほぼ完存している。底径13.3cm、器高6.9cm(現存)である。33の鉢は丸い底部と上に大きく開く半球形状の体部を有するもので、口縁外面は横方向のナデによりハケ目が消えている。口径16.0cm(復原)、器高6.7cmを測るものである。全体の1/2が遺存している。34～36は土師器甕で、34・35は「く」の字に大きく外反して折れ曲がる口縁を有する。35は口縁の約1/3が遺存している。36はやや小型のもので、頸部から上方にややすぼまる口縁をもつ。口縁の約1/3が残存している。37は小型の杯で、手づくねによるものである。38はS K05から出土した。39は包含層中から出土したものである。40の装飾器台は包含層中より出土した。41は縄文土器で、P19から出土している。前期の北白川下層式のものである。

第26図42～45は6トレンチより出土した。42は弥生前期壺で、S D01より出土した。43は弥生時代後期の甕で、S P04より出土した。44は土師器高杯柱状部で、45は埴輪片で、外面に朱が塗布されている。ともにS D02より出土した。

(岩松 保)

(2) 7トレンチ出土遺物(第27～33図、図版第24～30)

①溝S D02出土遺物

溝S D02からは、コンテナ20箱分の遺物が出土した。多くが第4層から出土したが、冬季における悪天候と湧水のため層位ごとの取り上げは十分ではない。ここでは、溝内一括資料として報告する。

a. 弥生土器(第27～32図、図版第25～29)

出土した弥生土器には、壺形土器(以下壺)、甕形土器(以下甕)、鉢形土器(以下鉢)、蓋形土器(以下蓋)および小型の鉢などがある。まず、これらの土器片の器種構成を考えたい。出土した土器の大半は、容器状のものと考えられる。これら容器は、部位ごとに壊れやすさが異なる。口縁部は薄く破損しやすく、底部や把手は厚く破損しにくい性質をもつ。特に弥生前期の土器の場合、

多くの遺跡で破損しにくい底部が目立つ傾向にある。S D02出土の弥生土器も類例にもれず底部が目立ち、口縁部は余り目立たない状況にあった。また、可能な限り接合作業に取り組んだが、甕が数個体復原できたのみであり、多くは破片でしかも同一個体の破片はまとまって出土していないことが明らかになった。すなわち、S D02に投棄した段階ですでに、部位の足りない破片であったものが多いと判断された。

まず、口縁部及び連続する部位の形状から壺・甕・鉢・蓋および小型の鉢に分けてその個体数を把握した。口縁部の小片については形状の把握に不確定な要素が高くなるので、概ね3cm以上の破片に限った。その結果、壺31個体、甕41個体、鉢20個体、蓋2個体、小型の鉢3個体の計97個体を確認した。これら97個体の口縁部の残存率の合計を器種別に数えたところ、壺5.3個体分、甕6.7個体分、鉢1.9個体分、蓋0.3個体分、小型の鉢1.3個体分となった。その総合計は15.4個体分にすぎない。

一方、底部や把手を基準に分類すると、壺もしくは鉢の底部と考えられるものは49個体、甕は39個体、蓋6個体、小型の鉢3個体となる。なお、残存率が1/8以下のものは除外した。これらの計は97個体となり、偶然にも口縁部で認識した個体数と一致した。しかし、残存率の合計は付表に示すように57個体分と口縁部に対して大幅に多い。底部などに対して口縁部の数が大幅に少ないことは、これらの土器類が溝から離れた位置で壊れ、大破片のみが溝内に投棄されたことを示すものと考えられ、その意味ではこれらの土器群は集落内で使われていた土器群の構成比率を概ね反映したものと推測される。

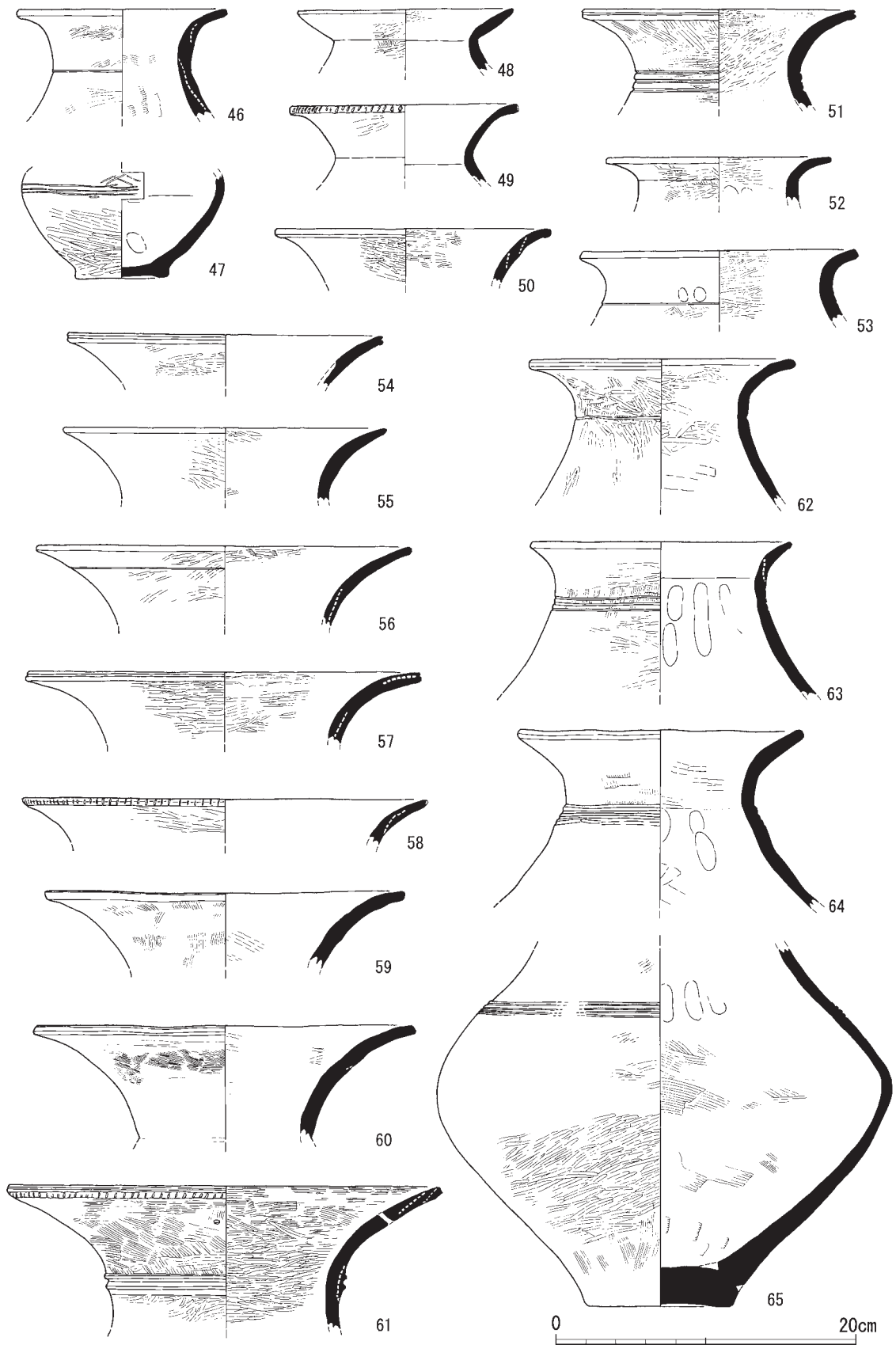
口縁部と底部等による個体数の認識が概ね一致したこと、及び残存率の合計を基にした各器種の構成比率が概ね大差ないものであったことは、その個体認識方法に大きな間違いがないということであろう。よって、S D02出土弥生土器の各器種の数量は、壺・甕・鉢及び小型の鉢の口縁部での確認数に把手で確認した蓋の数を足したものとし、壺31、甕41、鉢20、蓋6、小型の鉢3の101個体と仮定することができる。また、器種構成比率は、壺3：甕4：鉢2：その他1となる。以下、各器種について詳細を述べる。

壺(第27図46～65、第28図66・67、第32図134～165)

壺は口縁部により31個体確認した。なお、体部の文様等について特徴的なものを拓影と断面図で示した。これについては同一個体を含む可能性が高く、個体数に反映させていない。なお、各

付表2 7トレンチ溝S D02出土弥生土器の構成に係る数量把握

	口縁部				底部・把手			
	個数	割合	残存率の合計	割合	個数	割合	残存率の合計	割合
壺	31	32.0	5.3	34.3	49	50.5	29.8	52.3
鉢	20	20.6	1.9	12.3				
甕	41	42.3	6.7	43.2	39	40.2	18.2	31.9
蓋	2	2.1	0.3	2.0	6	6.2	6.0	10.5
小型の鉢	3	3.1	1.3	8.2	3	3.1	3.0	5.3
	97	100.0	15.4	100.0	97	100.0	57.0	100.0



第27図 出土遺物実測図 土器3(7トレンチSD02-1)

土器の口径については、残存率が1割以下のものについて約〇〇cmと標記した。

壺には広口壺以外に長胴の体部を持つ直口壺(67)がある。

広口壺には頸部が締め口縁部が外反するもの(46~65)と、大型で太い頸部をもつもの(66)がある。66・67を除くすべての壺が前者に該当する。口径14~15cmの小型のもの、17~21cmの中型のもの、23~29cmの大型のものとして記述を進める。なお、外面及び口縁部内面の調整はハケと磨きによって丁寧に行われており、体部内面はハケとなでによるものが多い。胎土には地元の花崗岩を起源とする石英・長石を含む。

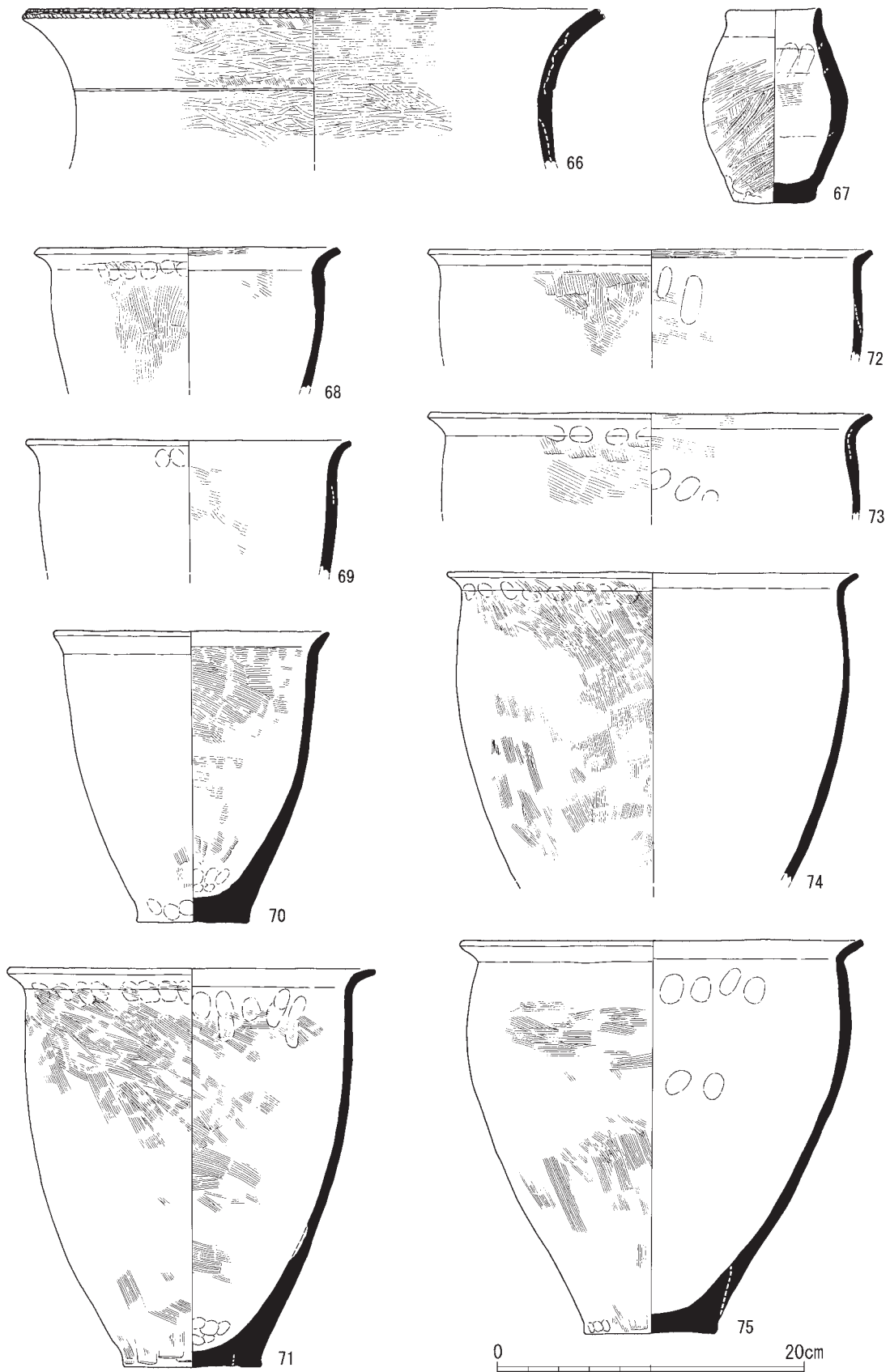
46は口径14.7cmを測る小型の壺で、頸部に段をもつ。小型のものには、48・49・52があり、それぞれ口径14.2cm、15.0cm、15.0cmを測る。49は、口縁端部に刻み目をもつ。47は体部下半部である。胴部最大径の位置に3条のヘラ描き沈線を施す。

口縁部の直径が17~21cmを測る中型のものには、50・51・53~55・62~65がある。

53は頸部境に段をもつもので口径約18cmを測る。段はヘラ状の工具で付けられているがその不連続性から貝によるものの可能性がある(図版第29)。頸部に段のみをもつものには、ほかに62・134~137がある。口径17.0cmを測る62はハケによる段を付けたのち、段部にヘラによる沈線を1条施文している(図版第29)。頸部下半部の137は、ハケによる段を付ける(図版第29)。口径18.6cmを測る64は頸部に段と沈線を組み合わせて施文するものである。段はハケ状工具により削り出して付けられ、その下に3条のヘラ描き沈線を施している。65は口縁部を欠くものであるが、頸部と胴部の境(以下頸胴部界と記す)に段と4条のヘラ描き沈線を施す。底部径9.8cmを測る。同様に段と沈線文を組み合わせるものに140~142・144・146がある。140は頸胴部界に浅い段の下に2条のヘラ描き沈線を施す。141は段を削り出した後、段の部分とその上に沈線を施す。142は頸胴部界付近に段+ヘラ描き沈線5条で施文を行っている(図版第29)。144は頸胴部界付近に2段にわたってヘラ描き沈線を施すもので、上段は段+ヘラ描き沈線3条で構成されている(図版第29)。下段は欠損しているため1条のみヘラ描き沈線を観察できる。146は頸胴部界付近に段+ヘラ描き沈線3条の下に貝殻羽状文を施す(図版第29)。

削り出し突帯をもつものには139・143がある。139は、頸胴部界付近に上下2段の削り出し突帯をもつものと思われる。上段は削り出し突帯に3条のヘラ描き沈線を施す。下段は欠損しており削り出し突帯があることがわかるにすぎない。143は胴部最大径のやや上に削り出し突帯を付けヘラ描き沈線3条を施す(図版第29)。その施文位置から139同様上下2段に施文されている可能性がある。

頸部や頸胴部界付近にヘラ描き沈線で直接施文するものには、51・63・166(図版第29)がある。51は口径18.0cmを測り、頸部に3条のヘラ描き沈線を施す。口縁端部にも1条のヘラ描き沈線をもつ。63は、口径17.2cmを測り頸部に3条のヘラ描き沈線を施す。51と63は同じく3条のヘラ描き沈線紋を施すものだが、口縁の形状は大きく異なり、51は頸部から口縁部が大きく外反して広がり、63は短く外反して終わる。内面の調整も異なり、51が頸部の下まで丁寧なヘラ磨きが残ることが特徴的である。166は、中型もしくは大型の壺の頸胴部界付近で、ヘラ状工具による直線



第28図 出土遺物実測図 土器4(7トレンチSD02-2)

文が施されている(図版第29)。54は口径23.0cmを測り、口縁部に1条の沈線紋をもつ。55は、口径約21cmを測る。

56～61は、口径が23～29cmを測るやや大型のものである。56は、口径約28cmを測る。口縁部と頸部の境に1条の浅い沈線紋を施す。57は口径26.0cmを測り、口縁端部に1条のヘラ描き沈線を施す。58は口径26.8cmを測り、口縁端部に刻み目を施す。59、60はそれぞれ口径23.8cm・24.9cmを測る。61は口径28.7cmを測り、口縁端部下端に刻み目を施すものである。口縁端面にはハケによるものか1ないし2条の浅い沈線が観察できる。口縁部には焼成後の補修孔があり、頸部には2条の貼付け突帯をもつ。頸部に貼付け突帯をもつものには、ほかに突帯上に刻み目をもつ157～159がある。157(図版第29)・158は1条の突帯を、159(図版第29)は3条の突帯である。

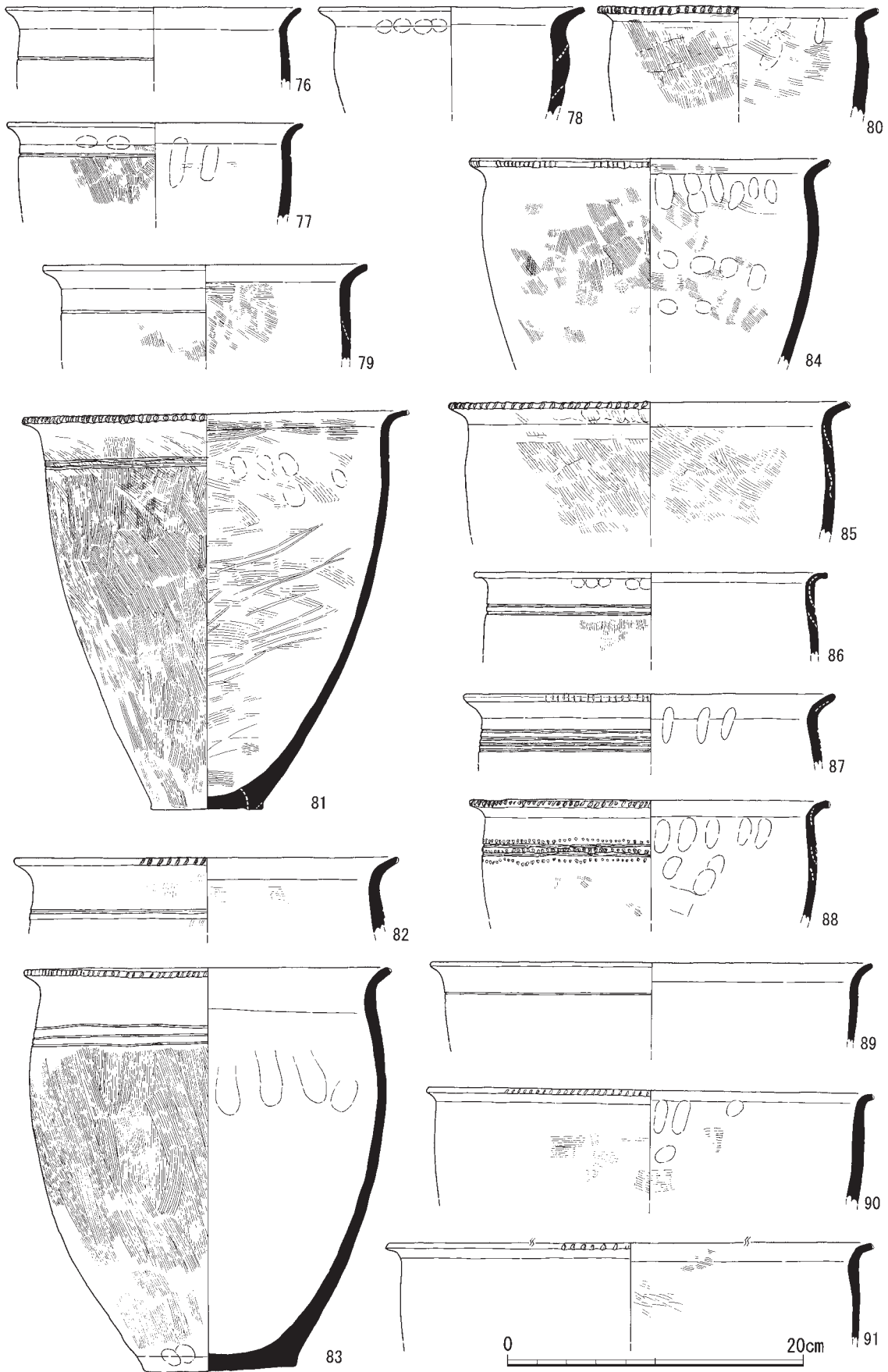
これら大型の壺は頸部以下の様子が不明であるが、61に突帯文が存在することから、肩部から胴部にかけて突帯文と羽状文で飾るものの可能性がある。

羽状文で飾るものには、146～156がある。羽状文はすべて無軸のもので、多くは復縁の殻内面に襷をもつタマキ貝などが利用されている(図版第29、146・150)。少数ながら、ヘラによる施文(155)も認められる。タマキ貝等による施文の場合は鋸歯状の圧痕が下を向いたものが大半である。ヘラ描き沈線と組み合うのは先述した146と147である。147は頸胴部界から胴部最大径直上まで5条のヘラ描き沈線+2.5組の羽状文+直線文1条+3.5組の羽状文+直線文2条で施文される。148には、縦位の3条の直線文があり、これを境に羽状文の向きを変えている(図版第29)。縦位の直線文は150(図版第29)・153にも認められるがいずれも3条である。148の下段の2条の沈線文が断続的な直線に見えること(図版第29)、153の横位の沈線に鋸歯状圧痕がわずかに見えること(図版第29)、羽状文が貝殻施文同様均質にわずかに円弧を描いていることなどから、鋸歯状の圧痕の見えないものの多くは復縁の内部に襷をもたないはまぐりなどで施文された可能性が高い。151・152(図版第29)は、羽状文・直線文以外に竹管文を施文している。151は、貝殻の鋸歯状の圧痕が上を向く数少ない例である。羽状文には頸胴部界付近から胴部最大径直上までに施された突帯文と組み合うものが多い。150・152・155・156・164・165が該当し、多くは145のヘラ描き沈線の配置と同じく2段に構成されるものと考えられる。突帯は断面三角形の突帯を2条並べたものが多いが、3条から構成されるものもある。突帯上に刻み目をもつものと持たないものがある。165は、上下2段の突帯間に半円状の突帯による区画をもつもので、区画内には羽状文を施さない。

このほか、160～163のように貼り付け突帯文のみ観察できるものもある。なお、160は破片表面全面に赤彩がある(図版第29)。

66は口縁部に段をもつ大型の太頸をもつ広口壺である。口径約37cmを測り、高さは60cmほどになると予想される。口縁端部をヘラによる有軸羽状文(綾杉文)で飾る。67は、口径5.8cm、器高12.8cm、底径5.4cmを測る短頸の直口壺である。外面はハケのあとヘラ磨きを行っている。66・67ともに石英・長石を含む在地の胎土をもつ。

甕(第28図68～75、第29図76～91)



第29図 出土遺物実測図 土器5(7トレンチSD02-3)

甕は倒鐘形を呈し、内面をハケとナデで、外面をハケで調整する。胎土はいずれも石英・長石を含む在地の花崗岩に由来するものである。口径17～20cmを測る小型のものと、口径24～31cmを測る中型のものがある。

68～75・78は飾らない甕である。口径17～20cmを測る小型の甕には68～70・78がある。68は口径19.4cmを、69は口径約20cmを、70は口径17.9cm・器高19.0cmを測る。いずれも短い口縁部が斜め上方に伸びる。78は口径17.8cmを測り口縁部が開き気味に延びる。72～75は口径24～31cm中型の甕である。72は短く屈曲する口縁部を持ち、口径28.8cmを測る。71・73～75はやや開き気味に延びる口縁部をもつ。71は口径23.9cm・高さおよそ26cmを測る。73は口径28.4cm、74は口径26.8cm、75は口径24.0cm・器高25.7cmを測る。

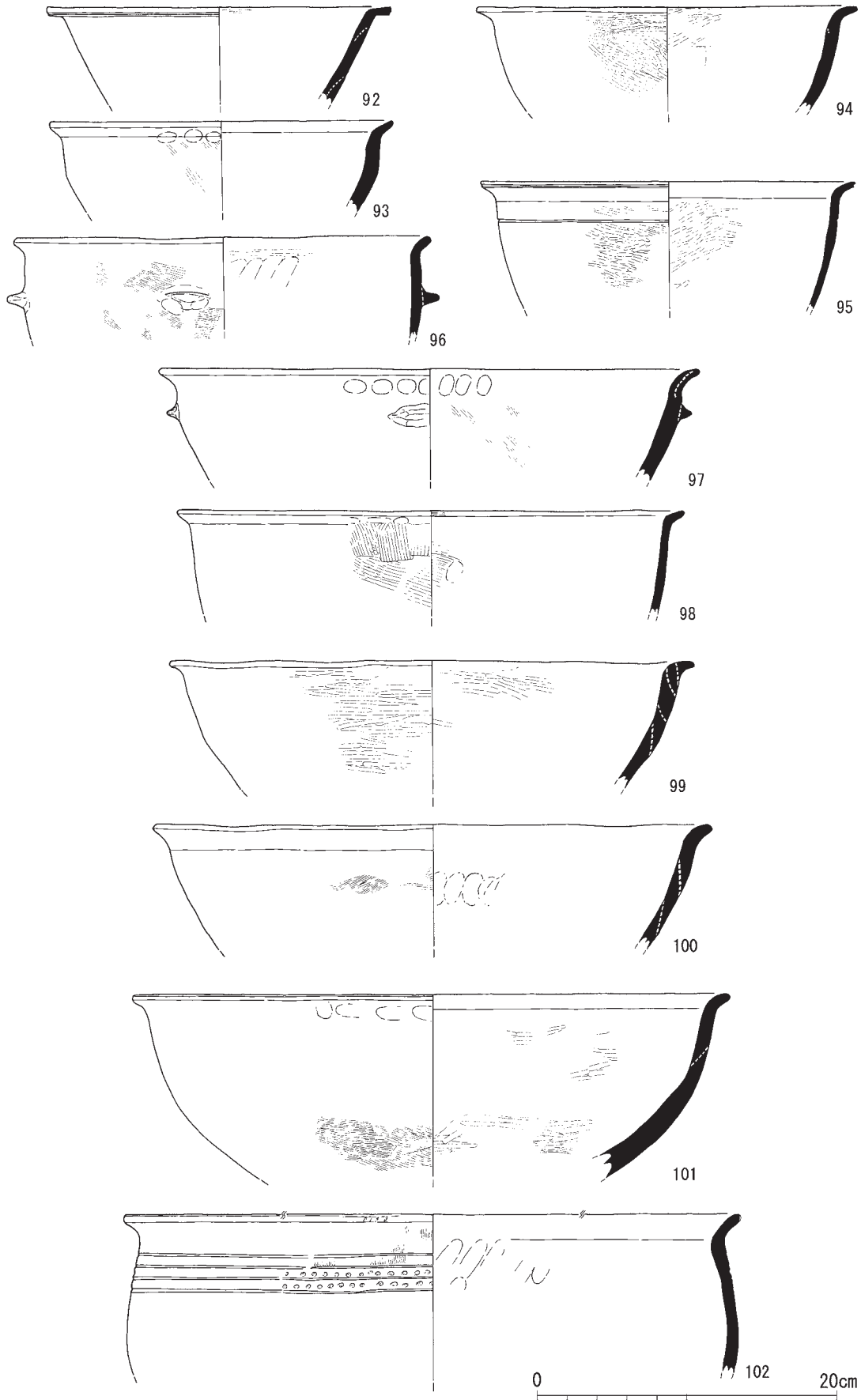
76～78・80～91は口縁部や頸胴部界付近を刻み目やヘラ描き沈線などで飾るものである。本来遠賀川式土器の甕は口縁部を刻むものであるが、日本海側には口縁部を刻まない甕が一定程度あることが知られている。確認した甕41個体のうち、口縁端部を刻むものは14点に過ぎず、全体の25%と少ない。口縁端部に刻み目をもち頸胴部界を飾らない甕には、80・84・85・90・91がある。80は小型の甕で口径18.9cmを測る。84は口径24.1cmを、85は27.0cmを、90は短い口縁部をもつもので口径30.4cmを測る。91は小破片で口径約32cmである。

76・77・79・81～83・86～89はいずれも頸胴部界付近にヘラ描き沈線などを施すものである。これらには、段や削り出し突帯、貼り付け突帯は見られない。76・77・79(図版第29)は小型のもので、頸胴部界付近にヘラ描き沈線を1条施文する。口縁部径は76・77が19.8cmを、79が約21cmを測る。中型の甕では口径29.8cmを測る89のみが1条の沈線文で飾られ、それ以外は2条以上の沈線文により飾られている。81は口縁端部に刻み目を施し、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文2条を施す。口径26.7cm、器高27.1cmを測る。内面には松葉状の磨き痕跡が見られる。82も口縁端部に刻み目をもち2条のヘラ描き沈線文を施すもので、口径約26cmを測る。86は口縁端部に刻み目をもたず口径約24cmを測る。83は口縁端部に刻み目をもち、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文3条を施すものである。口径25.0cm・器高27.6cmを測る。87は口縁端部に刻み目をもち、頸胴部界付近にヘラ描き沈線文を4条施すもので、口径24.1cmを測る(図版第29)。88は口縁端部に刻み目を施し、頸胴部界付近に2条のヘラ描き沈線文を引き、その上下3段にヘラ状工具の先端を利用した三角刺突文で加飾するものである(図版第29)。口径24.4cmを測る。

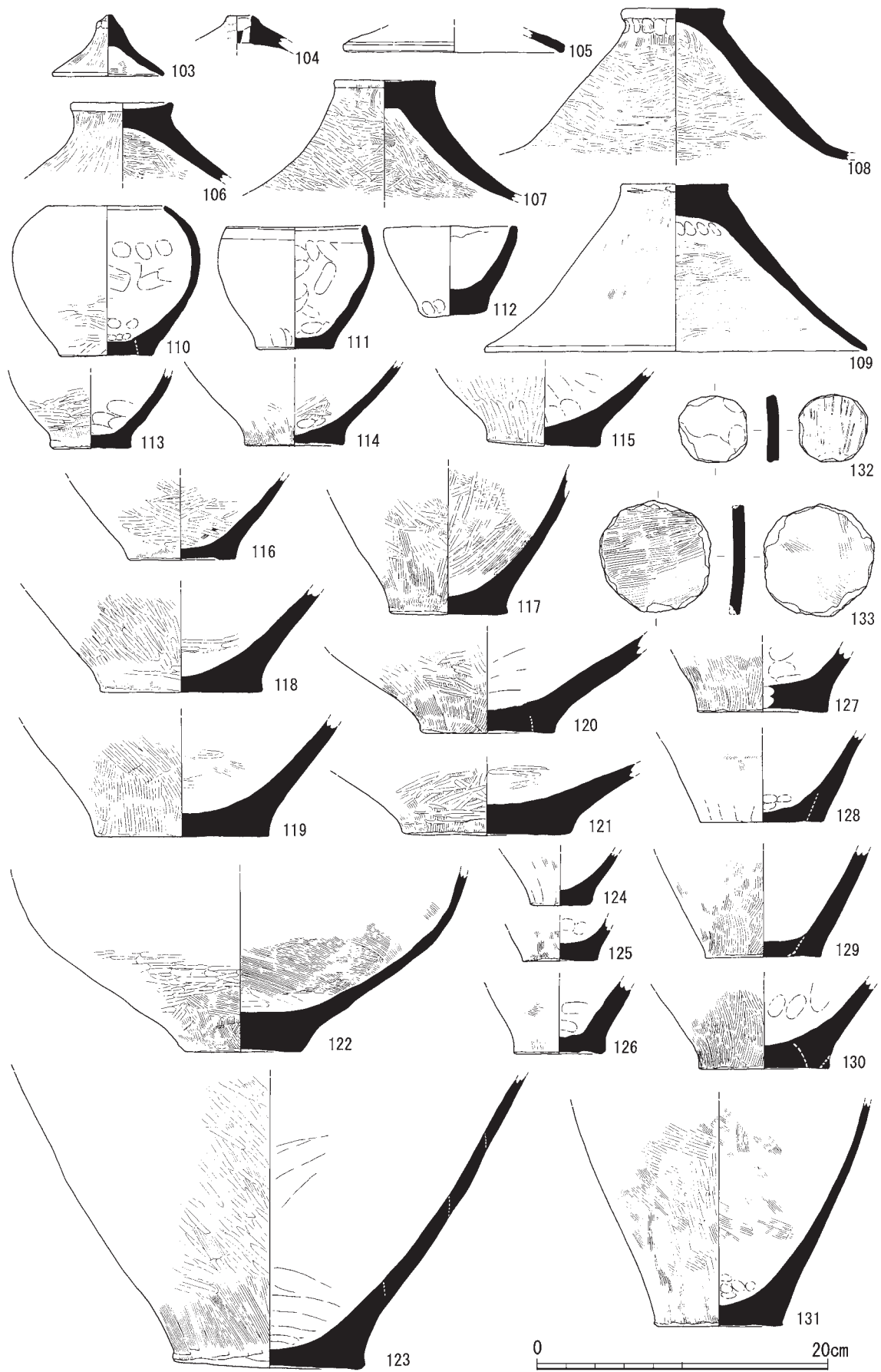
鉢(第30図92～102)

鉢は20個体確認したが小片が多く、口縁部の残存率が10%を超えるものは8個体で、全形をうかがえるものがない。この8個体については、口径13.0cmを測るもの1点、口径25～28cmを測るもの3点、33～40cmを測るもの4個体があり、概ね大中小の法量に分かれるものと考えられる。甕同様短い口縁部が大きく開き外傾する体部から底部に至る。底部は壺と区分できない。内外面ともハケとヘラ磨きで丁寧に調整するものが多くみられる。胎土にはいずれも石英・長石が含まれる。

92～96は、中型の鉢である。口径23～28cmを測る鉢は12個体ある。92・93は口径約23cmを測る。



第30図 出土遺物実測図 土器6(7トレンチSD02-4)



第31図 出土遺物実測図 土器7(7トレンチSD02-5)

94は口径25.3cmを測る。95は口径25.0cmを測り、体部上半に1条のヘラ描き沈線文を施す。ほかに沈線1条をほどこすもの(口径約26cm)と2条施すもの(口径約24cm)がある。96は口径27.4cmを測り、体部上半に一对の把手をもつものである。把手をもつものは後述する97と2個体確認した。

97～102は口径33～40cmを測る大型のものである。把手をもつ97が口径約36cmを、98が33.4cm、99が35.3cm、100が36.8cm、101が39.9cmを測る。102は体部が直立気味のもので、体部上半に3本のヘラ描き沈線を施し、その中段と下段に円形に近い三角刺突文を施す(図版第29)。口径40.8cmを測る。

蓋(第31図103～109)

大小6個体確認した。103は乳頭状のつまみをもち、口径約7.6cm、器高4.2cmを測る。104も同様に乳頭状のつまみをもつが頂部に孔をあける(図版第29)。この2点は小型の鉢もしくは壺の蓋と考えられる。105～109は頂部の平たい傘状の蓋である。106～109は内外面を磨きで調整する。105が口径14.8cmを、109が口径26.2cm・器高11.5cm・天井部径7.3cmを測る。これら傘状の蓋には、内面に付着物があるものが含まれ、甕の蓋と考えられる。

底部(第31図110～131、図版第29)

壺、甕及び鉢の底部と考えられるものを88個体確認した。このうち113～123は壺もしくは鉢の底部である。124～131は甕の底部と考えられる。底部には成形方法を反映して、あげ底状を呈するものが見られる(116、図版第29)。また、167をはじめ底部付近にモミ圧痕を残すものが、甕2個体を含む12個体に認められた(図版第29)。

b. 土製円板(第31図132・133、図版第24)

7トレンチSD02から2点出土している。132・133は甕の体部を円形に加工した円板である。穿孔はなく、紡錘車として利用されたものではない。

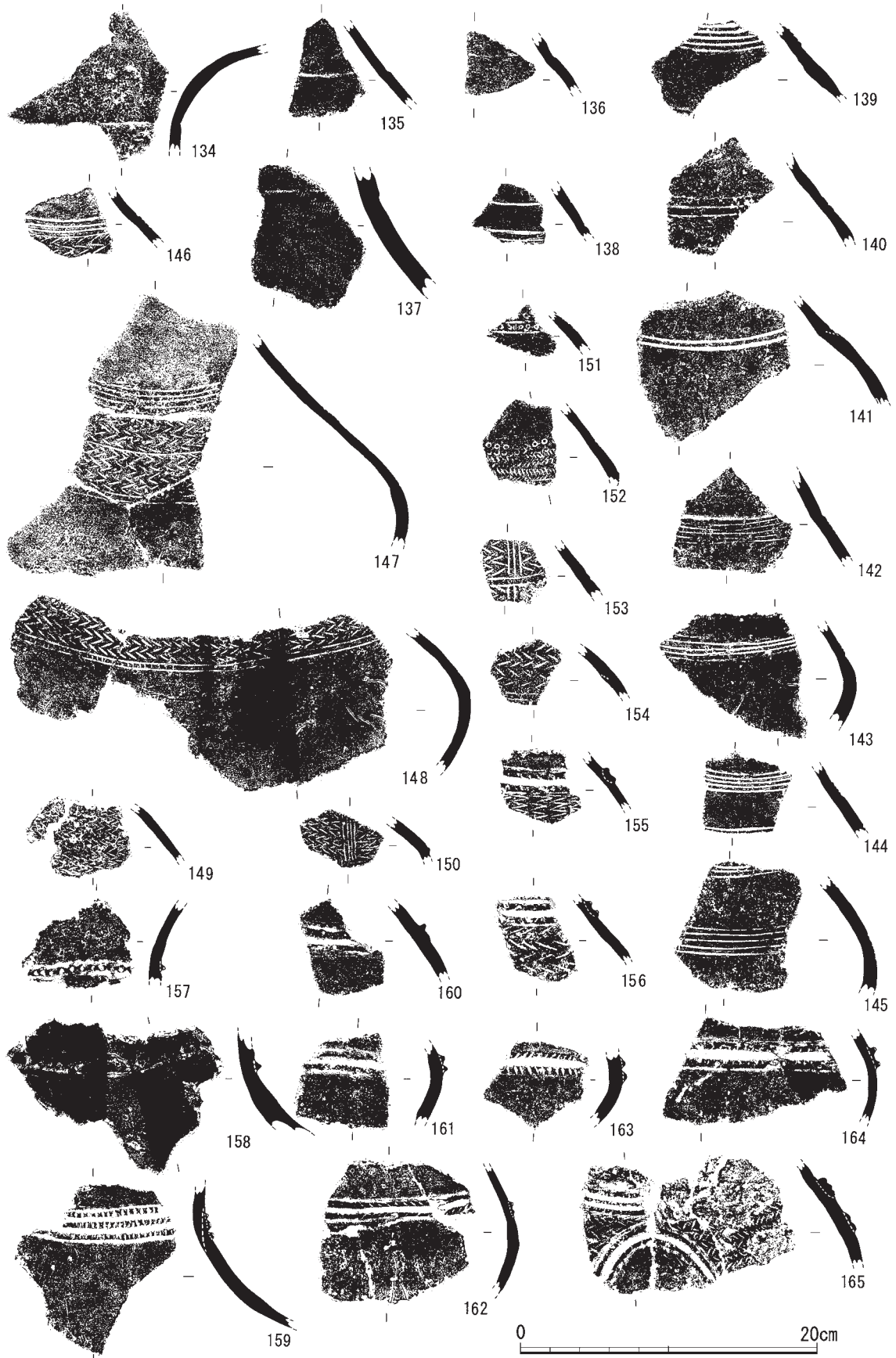
(肥後弘幸)

c. 人面付き土器(第33図、巻頭図版、図版第30)

7トレンチSD02に多量に廃棄された土器に混じって出土した。頭部は完存しているが、首より下が割れており、欠損している土器を飾った人面と考えられるが、詳細は不明である。残存高8.5cm、顔の長さ9.15cm、顔幅5.6cm、奥行き7.1cmを測る。焼成は良好で、淡茶褐色に焼けている。胎土は精良であるが、1mm弱の白色砂が混じる。土器の内部は中空で、壺や甕を作るのと同じように粘土紐を積み上げている。与謝野町教育委員会の文化財担当の方にお伺いしたところ、この土製品の胎土や色調などは、与謝野町内で焼かれたとしてもおかしくないものである、との感想をいただいた。

土偶とは異なり、人の頭部を写實的・立体的に表現していることを特徴とする。一見して目を引くのが、頭頂部から後頭部にかけて縦方向に造形された、鬣もしくは鶏冠の表現と判断される突起である。

目や口はヘラ状の工具により線刻されているだけで、やや簡略な表現である。それに対して、



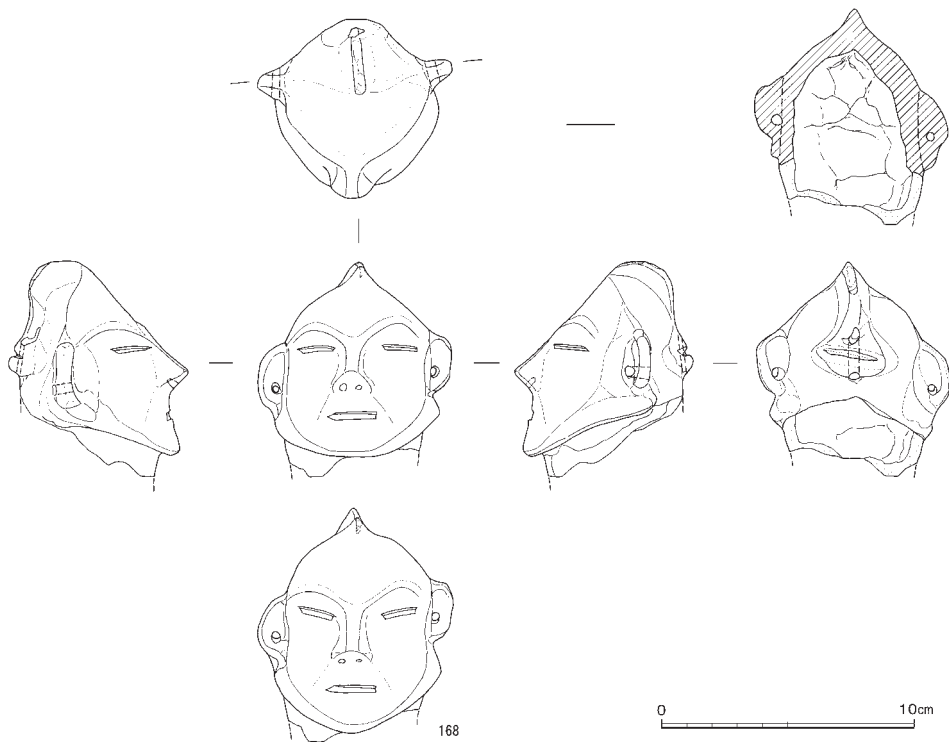
第32図 出土遺物実測図 土器8(7トレンチS D02-6)

鼻と耳は粘土を貼り付けて立体的に作っており、鼻と耳には管状の工具を刺突して穴が表現されている。隆起した鼻には、人間の鼻と同じ位置に2つの穴が穿たれているが、貫通はしていない。

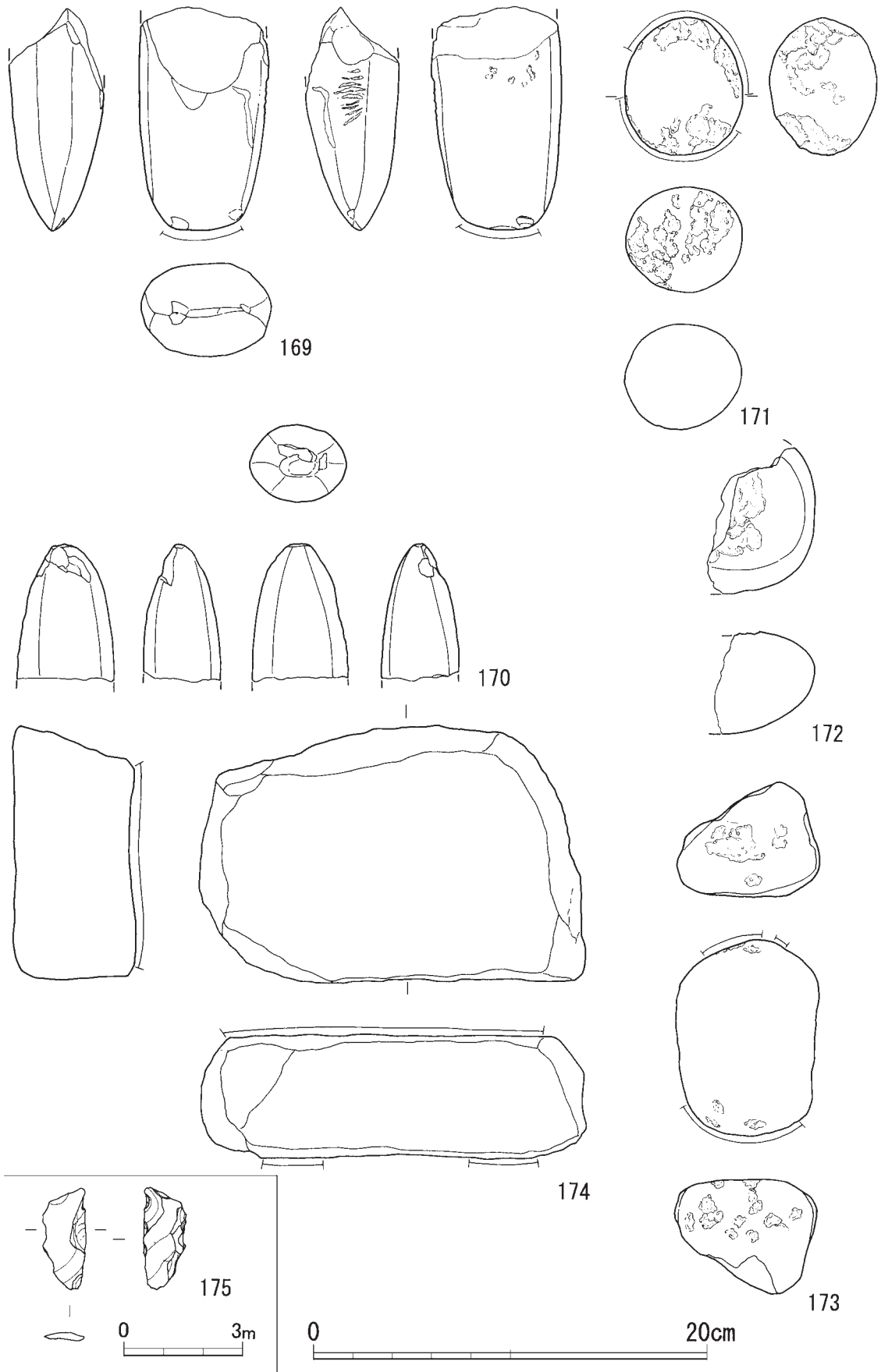
一方、耳の孔は両耳とも貫通しており、鼻の穴とは異なっている。耳の孔は耳介のやや下方、耳たぶの位置に正面方向から穿たれている。人間の外耳道の穴は顔の側面に空いているので、この孔は外耳道の穴を表現したものではないと思われる。人間の顔を正面から見ると耳のくぼみが認められるので、このくぼみを表現したと解釈することも可能である。しかしこの場合、なぜその孔が貫通しているのか、やや下方の耳たぶの位置に空けられているのかは理解できない。

以上のことから、耳飾り用のピアスの孔を表現していると考えるのが妥当と判断される。しかし、目や口・鼻は正しい位置に、線刻もしくは穴で表現されているのに対して、なぜ外耳道の穴が表現されていないのかはわからない。

頭頂部の突起は、前頭葉からはじまり、後頭部の上半部で終わっている。前頭葉から突起にかけてはなだらかに移行しており、前頭葉と突起の境に段や溝などの表現はなされていない。横から見ると、頭頂部が上方に引き延ばされたようになっている。突起の上辺は、他の部位と較べてややすり切れた状態になっているが、なぜこのようになったのかは不明である。突起は後頭部でほぼ垂直になって終わっており、平坦な後頭部には楕円形をした突起が貼り付けられている。その上にヘラで、横方向の線刻1条がなされている。この突起の上・下には孔が開けられており、両孔の位置が上下に合致することから、縦方向に貫通していると判断されるが、現時点では孔の内部に白色の砂粒が詰まっており、貫通していない。髪を束ねて後方に折り曲げて、その先端部を櫛と棒状のヘアピンで留めたものとも思われる。



第33図 出土遺物実測図 人面付き土器(7トレンチ)



第34図 出土遺物実測図 石器

額と顎の部分に朱色の斑点が観察され、頭頂部の突起の両側と根本部分が、赤黒く発色している。大阪府茨木市東奈良遺跡出土の人面付き土器では、朱・漆が塗布されており、温江遺跡の人面付き土器も朱や赤色顔料を混ぜた漆が塗布されている可能性が認められた。そのため、これらの部分について、理化学分析を実施した（理化学分析の節参照）。

その結果、額および顎の赤色斑については、水銀は認められず、鉄分の比率についても地の部分と比較して有意な差は認められなかった。一方、頭頂部の赤黒い部分は、水銀は検出されなかったものの、鉄分が多く含まれていることが判明し、ベンガラが塗布されていることが明らかとなった。漆の塗布については、肉眼観察の結果、「漆特有の光沢が無く肉眼的に判断することは困難であるが、極度に漆が劣化しているか、漆の塗りが甘いため残っていない」という所見を得ている。

人面付き土器は西日本での出土例は、弥生時代前期を中心に10例未満と少なく、いずれも首より下が欠損しているため、どのように土器を飾り、用いられたのかはよく分かっていない。東日本では中期を中心に盛行し、千葉県三島台遺跡での例では、壺の頸部の上に頭部が付いており、頭頂部に穴が空いている。温江遺跡の事例は、首の部分はほぼ平らに割れていることから、おそらく割れ口が水平となるように壺などの土器に取り付けていたものと思われる。

2) 石器(第34図、図版第24)

169は太形蛤刃石斧片で、基部は破損している。刃部が胴部に対して幅が狭いのが特徴的である。全体に丁寧に研磨されており、刃部には使用に伴う欠損がある。現存長11.3cm、厚さは最大で4.8cmで、重さ463gである。閃岩。4トレンチ北壁耕作土中より出土した。170は乳棒状をした石斧の基部で、刃部は欠損している。尻部は敲打により平らかに潰れている。長さは現存で7.0cm、幅、厚さは4.9cm、3.9cmである。170g。閃岩。7トレンチ溝SD02より出土した。171～173は敲石である。171はほぼ球形を呈した花崗岩の円礫で、側縁部に敲打痕が残る。長さ7.0cm、幅5.9cm、厚さ5.4cm、重さ290gである。7トレンチSD02より出土した。172は大半が欠損しているが、表裏面にすり面が見られ、その上に敲打痕が残るものである。3トレンチの包含層中より出土した。長さ7.5cm(現存)、幅5.4cm、厚さ5.2cm、重さ245gである。閃岩。173の敲石は礫の両端にのみ敲打痕が残るもので、長さ10.0cm、幅7.2cm、厚さ5.8cm、重さ527gである。閃岩。171・173はともに石器製作に用いられたと判断される。7トレンチSD02より出土した。174は石皿で、7トレンチSD02より出土した。長さ19.5cm、高さ6.2cm、幅は13.0cmである。石材は砂岩である。175は剝片で、6トレンチSK03より出土した。

このほか、7トレンチSD02からは磨石や砥石などが出土している。

(岩松 保)

6. まとめ

1) 7トレンチSD02出土の弥生土器

丹後から出土する弥生前期の土器には貝殻施文の土器が含まれることはよく知られている。京丹後市網野町松ヶ崎遺跡、同丹後町竹野遺跡、同久美浜町函石浜遺跡などの海岸部と京丹後市峰

山町途中ヶ岡遺跡、与謝野町蔵ヶ崎遺跡、舞鶴市志高遺跡などの内陸部の遺跡が知られる。しかしいずれも包含層資料や溝資料であり、丹後地域の前期弥生土器の変遷の具体像に迫れる資料ではなかった。今回は非常に狭い範囲から多くの土器が出土し、それらが時間幅の短いものであるかどうか、その場合、どの時期に位置づけられるのかが課題であった。

先述のように今回出土した資料は壺、甕、鉢、蓋などの器種に恵まれ101の個体を確認することができた。それらは、壺、甕、鉢ともにある程度法量規格の高いものであった。壺は、大・中・小に、甕は中・小に、鉢は大・中に概ね分類できる。このことは、時間幅の短さを裏打ちするものであり、丹後地域での初めての弥生前期の古いまとまった資料と言える。なお、今回の資料は昭和41年の竹野遺跡の織物工場建設時の出土土器群との共通性が高い。たとえば、壺Aとされたものは今回の小型・中型の壺に、壺Bとされるものは大型の壺に該当するものであろう。

壺には、ハケや削り出しによる段、削り出し突帯、貼り付け突帯とともにヘラ描き沈線文が組み合わせて用いられている。沈線文は最大5条で、1～3条のものが主体である。頸胴部界付近には貝殻文や貼り付け突帯文による施文が大型の壺に頻繁にみられる。甕・鉢には段をもつものはなく、多くは無文であるが、少数ながらヘラ描き沈線文を体部上半に施すものが少数ある。沈線文は最大4条で1～3条のものが主体である。これらの特徴から前期中段階の資料群と位置付けることができる。

今回の土器群は、貝殻施文以外にも丹後地域のこの時期の特徴を示すものである。遠賀川土器は口縁部を刻む甕を通有に所有するが、この土器群は無文の甕が3/4を占めている。体部に段をもつものはなく、沈線文を施すものは少ないことを合わせ、「飾らない甕」が主流である。当該地域が遠賀川式土器がまとまって見られる日本海側の東限であることを考えると、その状況は興味深い。また、甕蓋が一定量存在することも当該地域の特徴であろう。

(肥後弘幸)

2) 弧状に巡る溝について

今回の調査では、弧状に溝が巡る地点が数か所で確認できた。5トレンチ溝S D31・33、6トレンチ溝S D01である。時期が明確にわかるものは、5トレンチ溝S D31である。この溝は、幅約35～40cm、検出高20～25cmで、図上では径約6mに復原できるもので、底面には小ピットが穿たれていた。形状・規模より、竪穴が削平された竪穴式住居跡の周壁溝と判断されるものであるが、溝内からは第28図30～37の土師器甕・椀・高杯が出土しており、古墳時代前期のものと判断される。

同様に、5トレンチ溝S D33は、幅20～25cm、深さは数cm～10cmで、約2.2mにわたって検出したが、溝は北で東にやや湾曲しており、南から北に向けてわずかに深くなる。直径約6mに復原できる。検出した形状は竪穴式住居の周壁溝が削平を受けた形状であるが、土層断面では幅60cm、深さ10cmと幅広の浅いものであることから、竪穴の壁際が浅く掘り窪められたと言うべき形状である。これを竪穴式住居跡とすると、S K02が主柱穴の位置に当たり、内部より土師器小片が出土している。S K05からは弥生時代後期の遺物が出土している。

6トレンチ溝S D01は、幅25～30cm、深さ約10cmで、約3.8mにわたって検出した。その形状から竪穴式住居跡の周壁溝と判断されるもので、復原すると径7m程度の規模となる。

これらの溝は、通常であれば、その規模・形状から、円形竪穴式住居跡と判断されるものであるが、問題は、これらの遺構の所属時期である。基本的に、丹後地域でも古墳時代前期の竪穴式住居跡の平面形は方形もしくは隅丸方形を呈しており、円形のもの確認されていない。

温江遺跡の所在する与謝野町内の竪穴式住居跡の調査例をみると、駒田遺跡では古墳時代前期の竪穴式住居跡が調査されている。全貌は確認されていないが、平面形は5.36×3.17m以上の直線を基調とした隅丸方形である。今回の調査地の約800m東にある中上司遺跡では古墳時代中期後半の竪穴式住居跡が調査されているが、平面形は方形のものである。

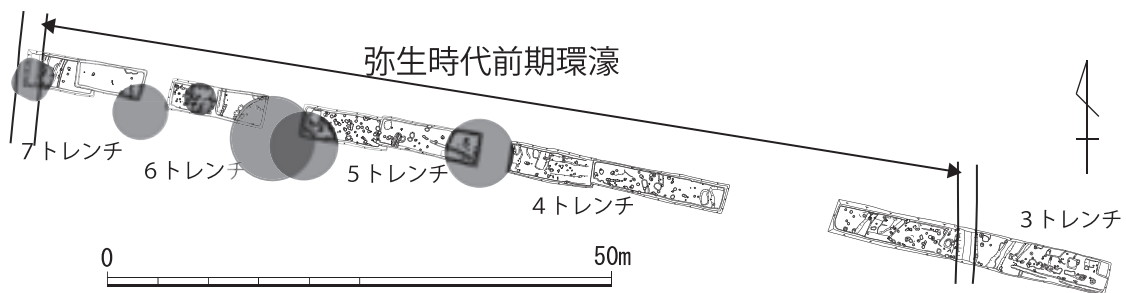
丹後地域に目を向けると、京丹後市の岩木遺跡では弥生時代後期の隅丸方形の竪穴式住居跡が調査されている。京丹後市橋爪遺跡では、古墳時代前期の弧状に巡る溝が調査されている。径約12mと温江遺跡のもの比べて大きなもので、内側中央に3.2×2.0mの隅丸長方形を呈する土坑があり、土坑(住居跡?)を囲繞する溝と考えられている。宮津市桑原口遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡が調査されており、基本的に弥生時代は円形で、古墳時代には方形を呈する住居跡となる。京丹後市日光寺遺跡では古墳時代前期の隅丸方形を呈する竪穴式住居跡が調査されている。

このように、温江遺跡で検出した弧状に巡る溝は、その所属時期の竪穴式住居跡の平面形を考慮すると、竪穴式住居跡とは判断できない。今回の調査では、弧状に巡る遺構全体を確認しておらず、全貌はわかっていない。加えて、5トレンチ溝S D31以外には、時期が明確に判断できる遺物が出土していないため、弥生時代に遡る可能性も否定できない。また、5トレンチ溝S D31も弥生時代後期の土器が混じっており、異なる時期の遺構が重複している可能性も否定できない。今後の検討課題として、問題提議しておきたい。

3) 竪穴式住居跡に類似する遺構について

前項では溝S D31・33・01について、竪穴式住居跡の可能性について指摘した。もし古墳時代前期に円形住居跡が残るのならば、台石とも言うべき石の存在がある。

6トレンチ溝S D31の西側、床面と判断される位置に25cm×40cmの三角形を呈した黄色の砂岩系統の平たい石が、半ば地山に埋もれて置かれている。同じく、溝S D33の東側1.6mと2.9mの位置には、平らな石が座っている。これらの溝が竪穴式住居の壁溝とするならば、これらの石



第35図 温江遺跡環濠・竪穴式住居跡状遺構配置図

は堅穴の床面に据えられていた台石と考えられる。

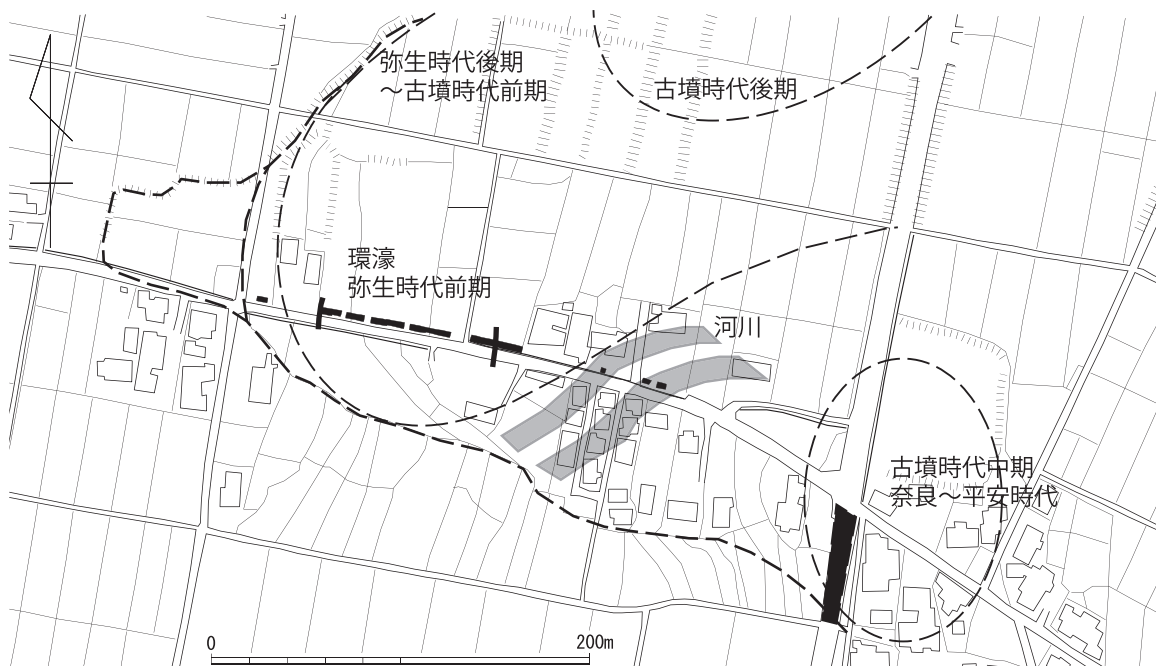
7トレンチでも同様の平石が見つかっている。トレンチの南東隅に砂岩系統の平石があり、掘形が認められず、地山面に埋まった状態であったが、この平石も堅穴式住居の床面に据えられた台石と考えられる。この場合、復原径約5mに支柱と判断される柱穴が並んでいる。そして、そのように理解すると、7トレンチでは黒褐色土を埋土とするピットが数基しかないことも、堅穴の深さが削平され、住居床面の支柱穴のみが検出できたと解釈できる。

さらに、6トレンチ溝SD01に見るように、6トレンチの遺構検出面は堅穴式住居の堅穴分の高さにわたって削平を受けている。6トレンチの中央部やや西側では、小ピットに混じって、大形の深いピットがほぼ径3mの円形に並んでおり、堅穴式住居の支柱穴と判断される。支柱穴と判断されるSK05・10からは土師器と判断される土器小片が出土している。

4) 温江遺跡で判明したこと

今回の調査地は、温江遺跡の西南部にあたり、弥生時代前期の集落跡を確認し、野田川流域で初めて成立した弥生集落の1つと考えられる。この集落の東辺と西辺には大溝があることから、東西幅100mほどの環濠集落と考えられる。調査地は丘陵の南辺部に位置し、集落の中心は今回の調査地の北側に位置するものと推測される。西側の大溝からは数多くの土器片が出土し、併せて人面付き土器が出土した。丹後地域の弥生文化や習俗を理解する上で、貴重な資料となるであろう。また、弥生時代前期の集落の後に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけても集落が営まれていることが判明した。

遺構の遺存状況は、今回の調査地は東から西に向けて緩やかに下る台地上に位置しており、田畑として開墾されているためか、包含層まで遺存している部分と大きく削平を受けている部分があるが、おおむね良好と言えるものである。



第36図 温江遺跡集落遺構想定図

環濠の中と判断される3～7トレンチでは、竪穴式住居跡と判断される遺構が6か所、堀もしくは掘立柱建物跡と判断される遺構1か所を検出した。これらは、明確に弥生時代前期までさかのぼるものはなく、時期がはっきりわかるものは弥生時代後期～古墳時代前期のものである。しかし、弥生時代前期の土器片を伴うピットや土坑が少なからず存在することから、前期の集落が存在することは確実であろう。

一方、弥生時代後期～古墳時代前期の集落および谷状地形が確認できたことは、周辺に数多く造られた前期～中期の古墳を実際に造営した集落である可能性もある。

また、6トレンチでは小片ではあるが、埴輪と判断される遺物が出土した。このことより、周辺に古墳もしくは埴輪製作に係わる施設が存在する可能性がある。

さらに、現地形を見ると、8トレンチの東側に段差が認められ、ここが丘陵の端にあたるものと考えられていたが、今回の調査で丘陵がさらに西に延びていることが分かり、温江遺跡の範囲はさらに西に広がるものと推測される。

遺構・遺物としては、耕作土・床土から出土したものを除くと、1～7トレンチでは弥生時代前期～古墳時代前期のものが大部分であり、わずかに、6トレンチで縄文土器片・埴輪片・須恵器小片、3・4トレンチで近現代の瓦片や陶磁器類を検出したにとどまる。遺構検出面を覆う包含層である黒褐色土には、弥生時代前期～古墳時代前期の遺物しか含まれておらず、過去の調査で確認されていた古墳時代後期・奈良～平安時代の遺構・遺物は全く確認できなかった。

このような遺構・遺物の堆積状況から、今回の調査地周辺は弥生時代前期～古墳時代前期に人が住まう居住区として用いられた後、人間がこの地を利用した形跡は、6トレンチの一部の溝以外には全く認められない。これは、古墳時代前期の集落が廃絶してすぐに、耕地として用いられたためと考えられるのではないだろうか。もしそうならば、温江遺跡が分布する丘陵上の水田開発は古墳時代中期にまでさかのぼると言え、それ以後、変わらずに、耕作地として土地利用されていたと考えられる。

(岩松 保)

調査参加者は以下のとおりである

調査補助員：奥田栄吉、小笠原順子、長谷川陶子

整理員：村上優美子、長尾美恵子、田中ゆかり、寺尾貴美子、谷上真由美、松井忍、山川雪乃、赤瀬弓子

作業員：田辺延也、赤西利夫、有田博子、横谷都子、砂後裕、的場三郎、足立征男、横谷秀樹、近本正秀、山崎記久子

参考文献

「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981 第2分冊 京都府教育委員会) 1981

「日光寺遺跡 国道178号バイパス関係遺跡 昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

「桑原口遺跡 京都縦貫自動車道関係遺跡 平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

- 『岩木遺跡 京都府丹後町文化財調査報告』第4集 丹後町教育委員会 1989
 『駒田遺跡・金屋遺跡 加悦町文化財調査報告書』第27集 京都府加悦町教育委員会 1982
 『中上司遺跡Ⅱ 加悦町文化財調査概要』5 加悦町教育委員会 1986
 『竹野弥生遺跡』丹後古代文化研究会 1992
 濱田延充「口縁端部を刻まない甕—山陰地域の遠賀川式土器—」(『みずほ』第34号 大和弥生文化の会)
 2002

付編 理化学分析 温江遺跡出土人面付き土器付着赤色物の蛍光X線分析

1) はじめに

与謝野町加悦に所在する温江遺跡からは、府道改良事業に伴い弥生時代前期の環濠と考えられる2条の大溝が検出され、その西側の溝より人面付き土器が出土した。ここでは、付着する赤色物について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

2) 試料と方法

分析対象資料は、弥生時代前期の人面付き土器である。資料は、顎・上唇の上部・額に褐色がかかった赤色物が見られ、また、頭頂部の「とさか」状突起に黒色物および赤色物が見られる。そこで、顎の褐色がかかった赤色物(No.1)、対照試料として赤くない箇所(No.2)、頭頂部の赤色物(No.3)の3ヶ所より、セロハンテープに極少量採取して分析試料とした(表)。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeⅡを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、この装置は試料ステージを走査しながら測定することにより二次元的な元素分布図を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析での測定条件は、50kV、0.82～1.00mA(自動設定による)、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

3) 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。

いずれの試料からもアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウ

表 温江遺跡人面付き土器分析試料一覧

分析No.	部位	備考
No.1	顎	褐色がかかった赤色物
No.2	土器内面	赤くない箇所
No.3	頭頂部	赤色物

ム(Ca)、チタン(Ti)、鉄(Fe)が検出された。

また、資料の実体顕微鏡観察により得られた画像を図版1上段～中段に示す。

4) 考察

弥生時代前期に使用されていた赤色顔料としては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀(HgS)で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており(岡田1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬1998)。

褐色がかった赤色物であるNo.1は、ケイ素など土中成分あるいは土器胎土に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定でき、顔料とするとベンガラの一種と考えられる。しかし、対照試料であるNo.2と比べると鉄が僅かに多い程度でしかなく、分析結果において明確な差異が得られたとは言い難い。そこで、当初は資料が装置試料室に入らないため測定を見合わせていた元素マッピング分析について、慎重に検討を重ね試料の置き方を工夫した結果、一部測定が可能であることが判明したため実施を試みた。その結果得られた元素マッピング図を、図版1下段に示す。図を見ると、赤色部と他の部分との鉄の輝度の差は殆ど無いことがわかる。実体顕微鏡下での観察でも焼成後に塗られた様子ではないことから、総合的に考えると顔料として意図的につけたものではなく焼成時の火加減等により偶然出来たものである可能性が高いと思われる。

No.3もNo.1と同様水銀は検出されず、鉄が高く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定でき、顔料としてはベンガラに分類できる。また、採取試料を生物顕微鏡下で観察したが、パイプ状粒子は観察されなかった。なお、頭頂部の赤色顔料とともに存在する黒色物については、漆特有の光沢が無く肉眼的に判断することは困難であるが、極度に漆が劣化しているか、漆の塗りが甘いために残っていないなど考えられる。

5) おわりに

温江遺跡より出土した人面付き土器に付着する赤色物について分析した結果、顎などにある褐色がかった赤色物は他の部分と鉄の含有量に殆ど差が無く、顔料である可能性は低いと判断された。頭頂部にある赤色物は、赤色顔料のベンガラと判断された。

竹原弘展・藤根久(パレオ・ラボ)

引用・参考文献

成瀬正和「縄文時代の赤色顔料 I—赤彩土器—」『考古学ジャーナル』No.438、pp.10～14、ニューサイエンス社 1998

成瀬正和「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』 pp.13～61、宮内庁正倉院事務所 2004

岡田文男「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』 pp.38～39 1997

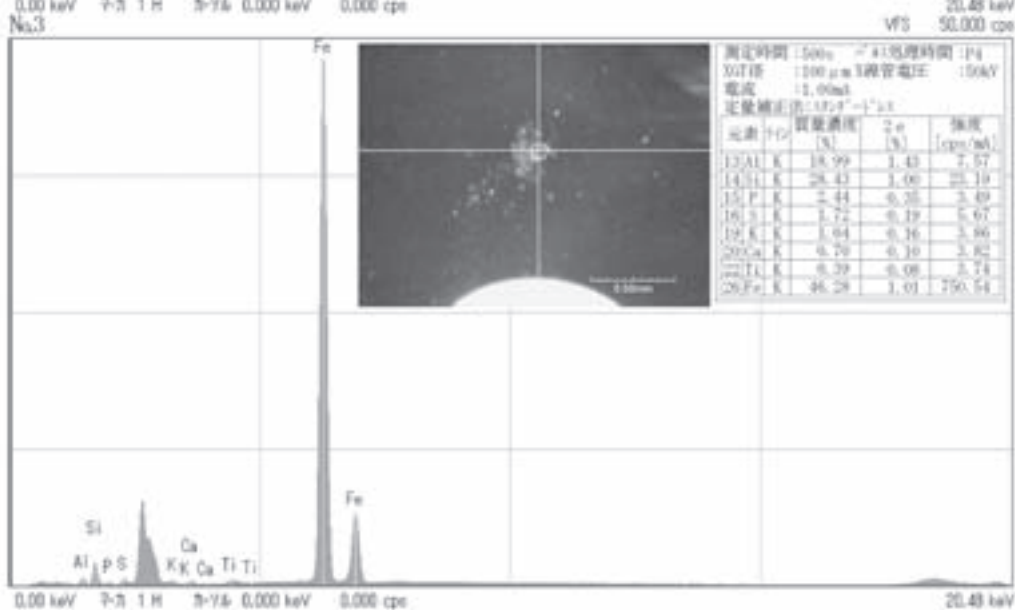
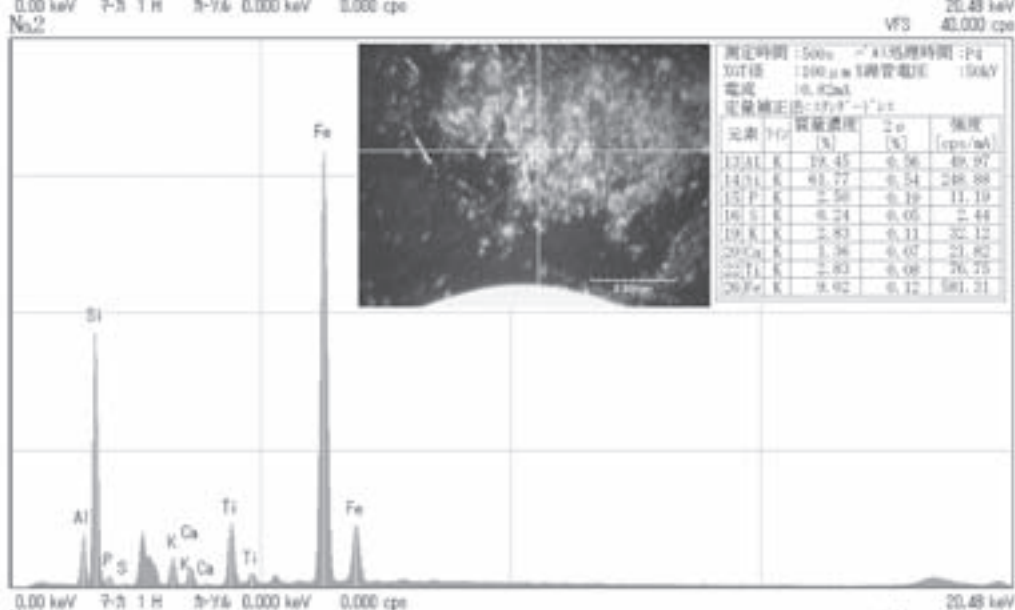
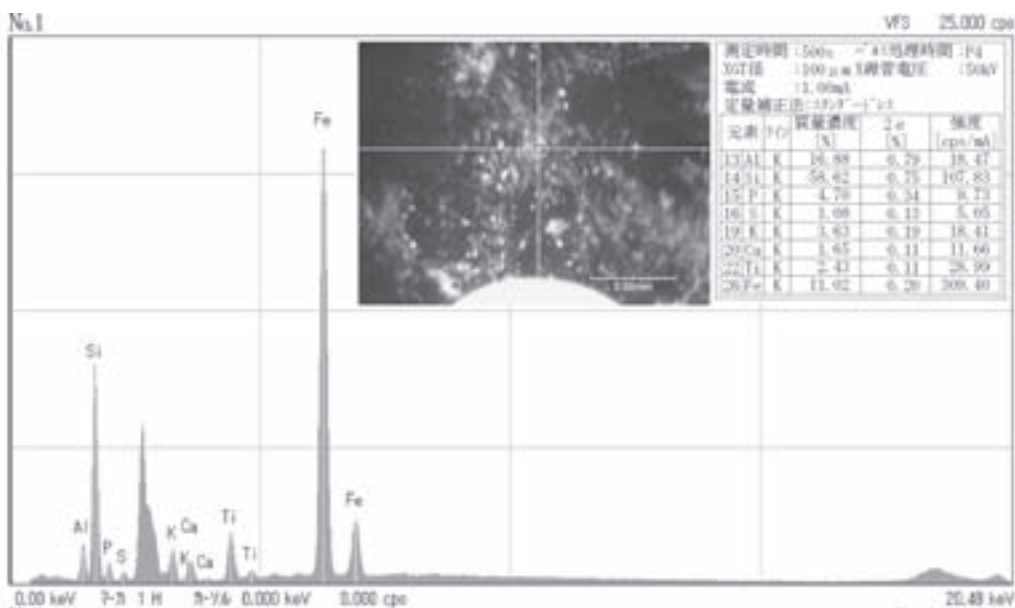


圖 版



(1) 調査地遠景(東南東から)



(2) 調査地遠景(西北西から)



(1) 1 トレンチW 全景(東から)



(2) 1 トレンチE 全景(南東から)

(1) 1 トレンチW 北壁土層西半
(南東から)



(2) 1 トレンチE 北壁土層西半
(南東から)



(3) 1 トレンチE 北壁土層東半
(南西から)





(1) 2トレンチ全景(東南東から)



(2) 2トレンチ北壁土層(南南西から)



(1) 3トレンチE 全景(西北西から)



(2) 3トレンチE 全景(東南東から)



(1) 3トレンチE 東半現代土坑(西から)



(2) 3トレンチE 溝S D04・05(東南東から)



(1) 3トレンチE 溝S D04・05全景(南から)



(2) 3トレンチE 溝S D05北壁土層(南東から)



(1) 3トレンチW 全景(東南東から)



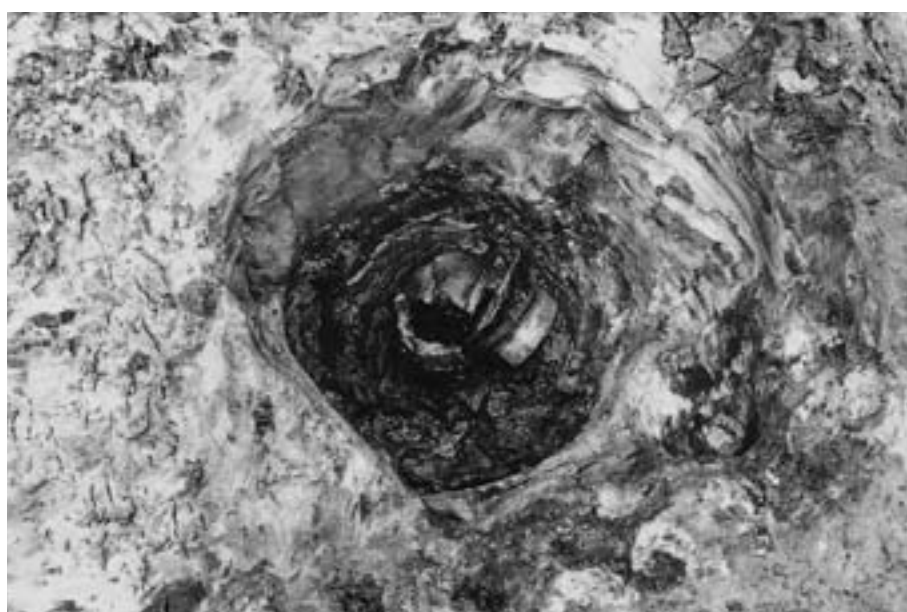
(2) 3トレンチW 全景(西北西から)



(1) 3トレンチE 東半現代土坑
(東南東から)



(2) 3トレンチW ピットP26
(北西から)



(3) 3トレンチW ピットP28
(南西から)



(1) 4トレンチE 全景(西北西から)



(2) 4トレンチE 全景(東南東から)



(1) 4トレンチW 全景(南東から)



(2) 4トレンチW 北壁土層(南西から)



(1) 5トレンチE 全景(西北西から)



(2) 5トレンチE 全景(東南東から)



(1) 5トレンチW 全景(東南東から)



(2) 5トレンチW 全景(西から)



(1) 5トレンチE 溝SD01(南西から)



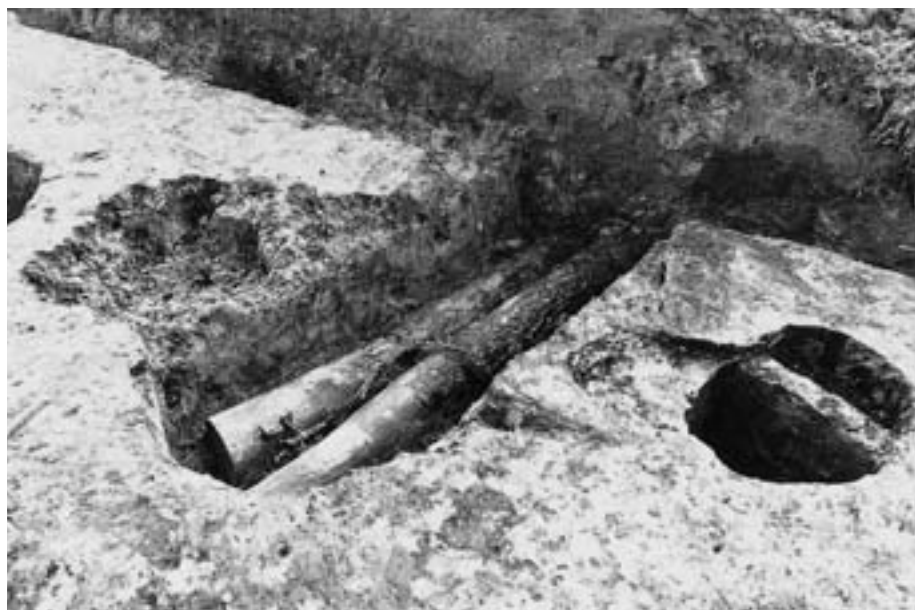
(2) 5トレンチW 溝SD31(東南東から)



(1) 5トレンチW 溝S D31
(北西から)



(2) 5トレンチE 土坑S K09
(北東から)



(3) 5トレンチE 土坑S X08
(北西から)



(1) 6トレンチ全景(西北西から)



(2) 6トレンチ全景(東南東から)



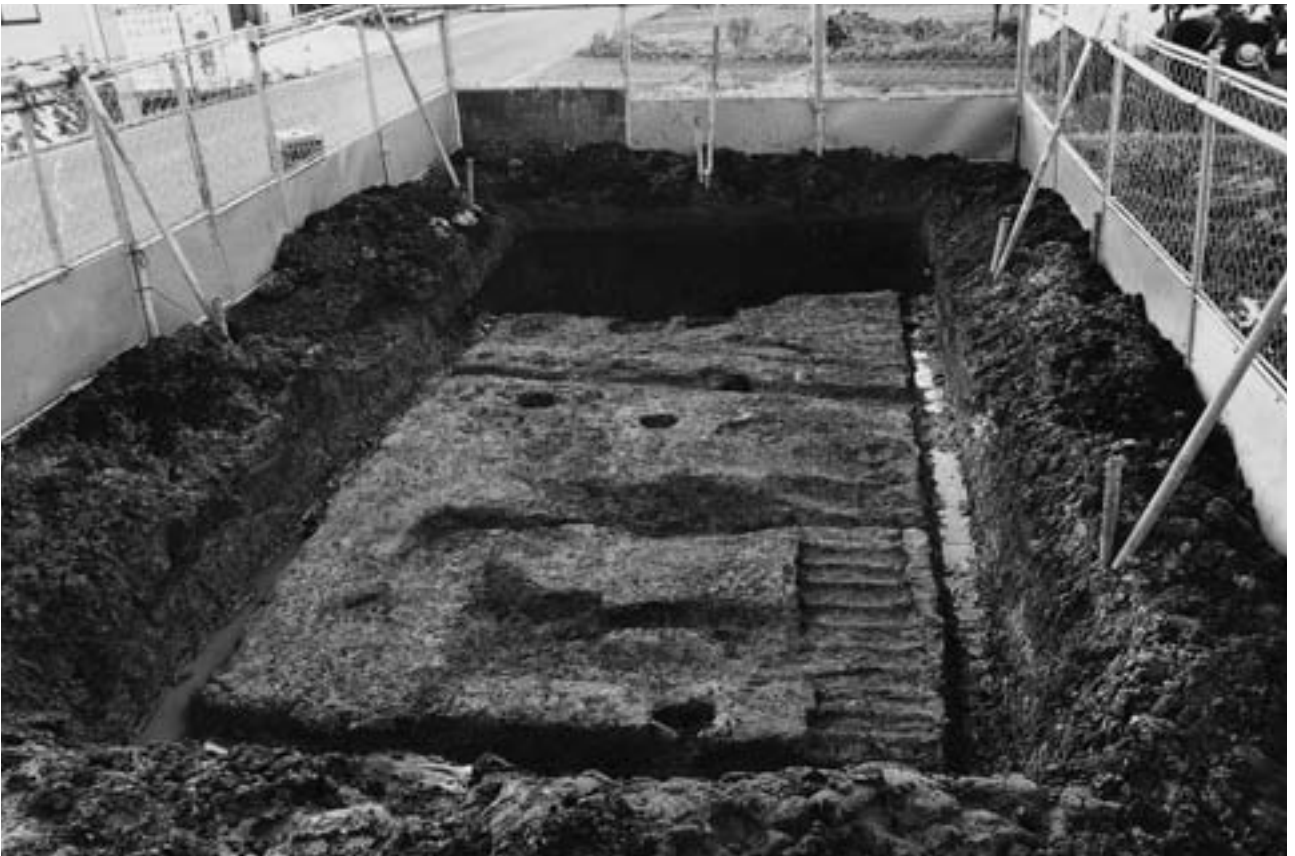
(1) 6トレンチ西半(西から)



(2) 6トレンチ溝S D01(南西から)



(1) 7トレンチE 全景(西から)



(2) 7トレンチW 全景(東から)



(1) 7トレンチW 溝S D02遺物出土状況(南東から)



(2) 7トレンチW 溝S D02完掘状況(南東から)



(1) 7トレンチW 溝S D02
遺物出土状況(南南東から)



(2) 7トレンチW 溝S D02
遺物出土状況(西から)



(3) 7トレンチW 溝S D02
遺物出土状況(北東から)



(1) 7トレンチW 溝S D02北壁土層(南東から)



(2) 7トレンチW 土坑S X03完掘状況(南西から)

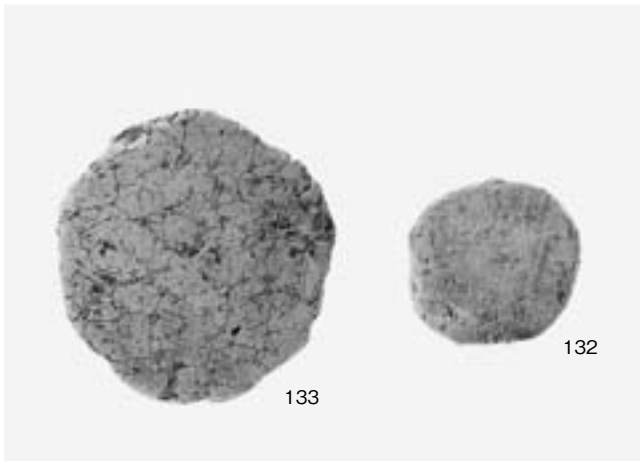
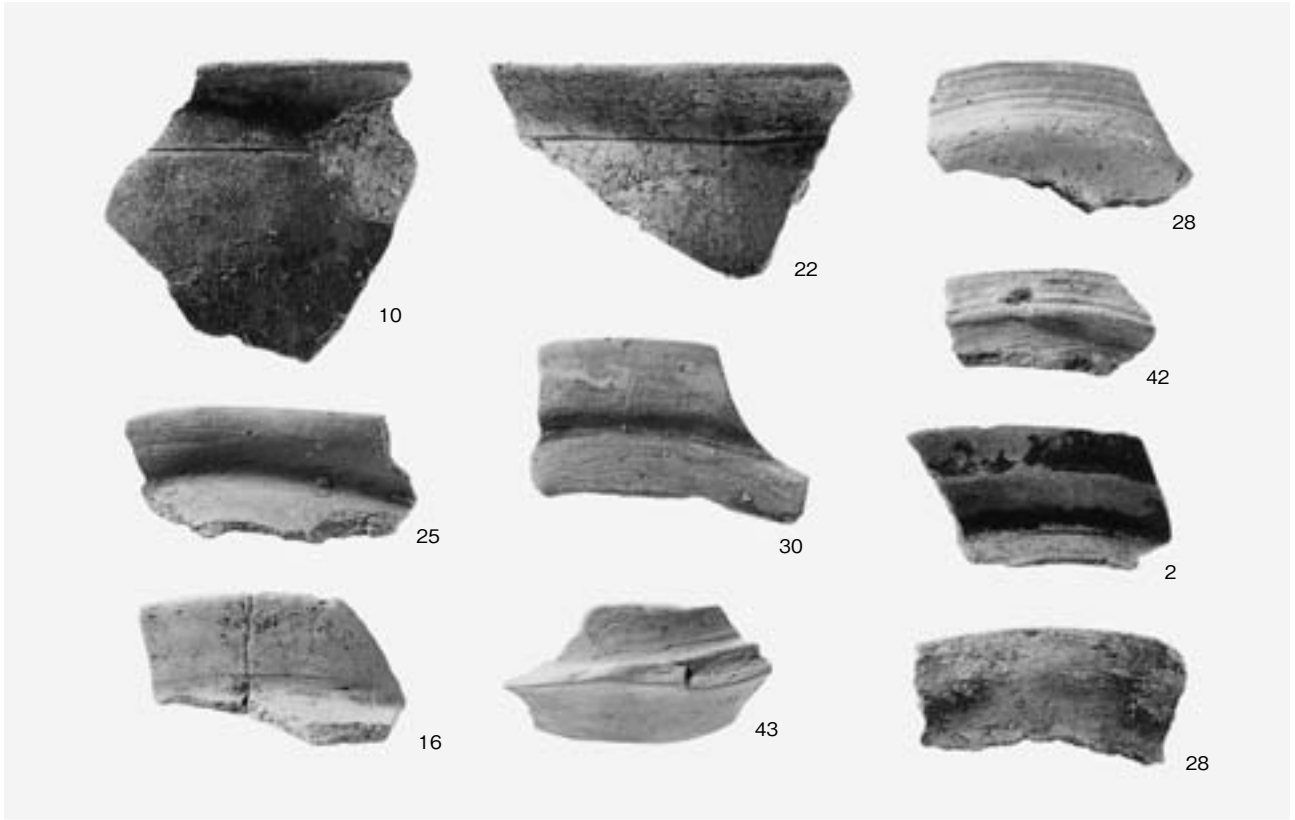


(1) 8トレンチ全景(西から)



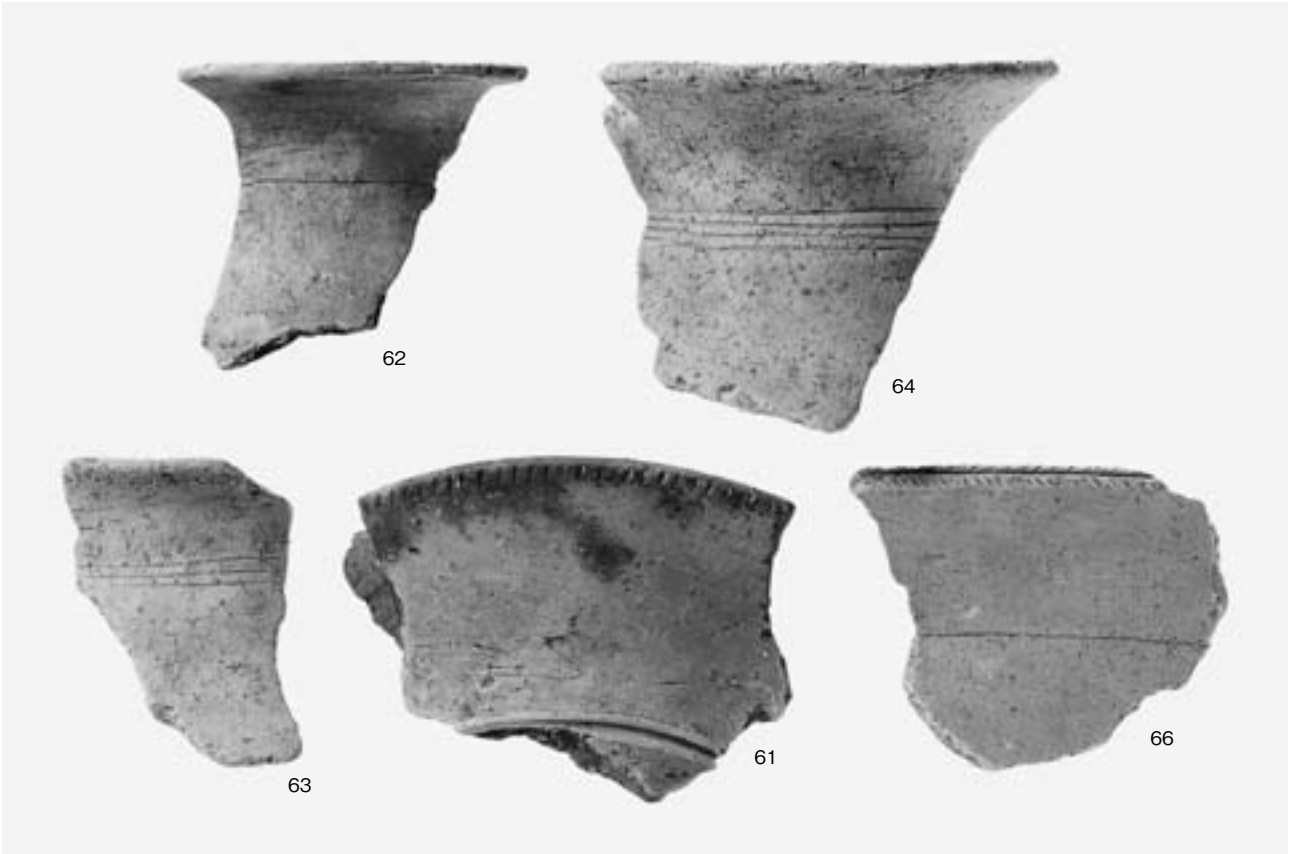
(2) 8トレンチ全景(北西から)



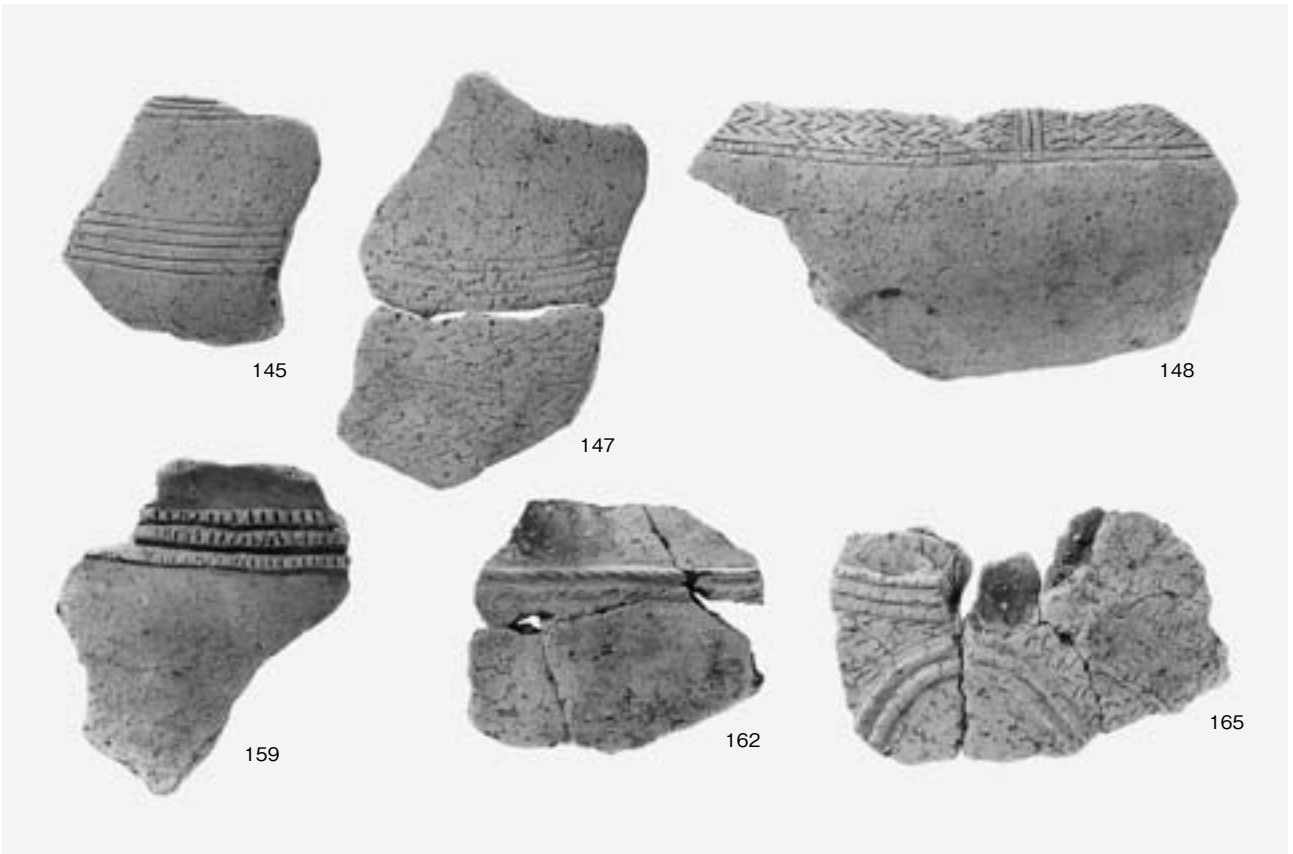




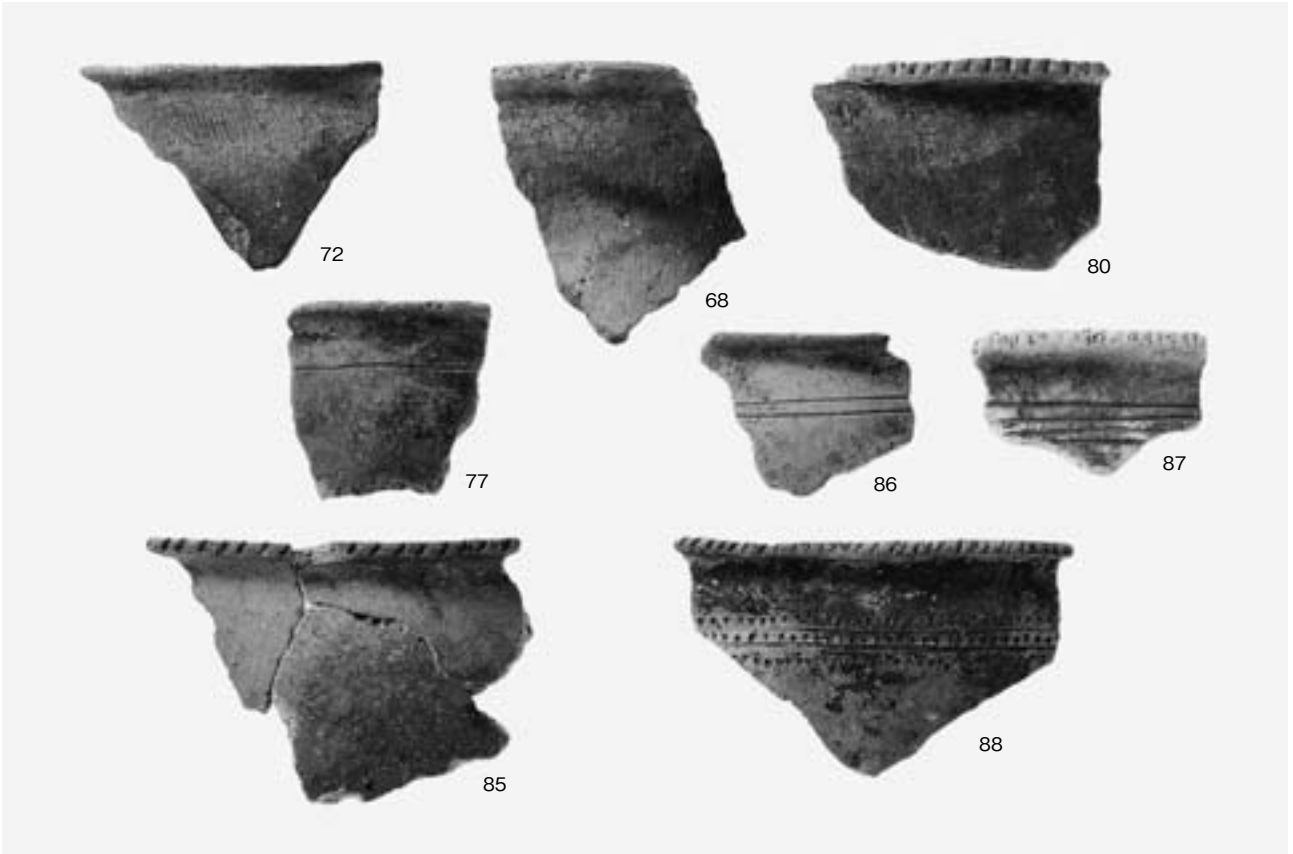




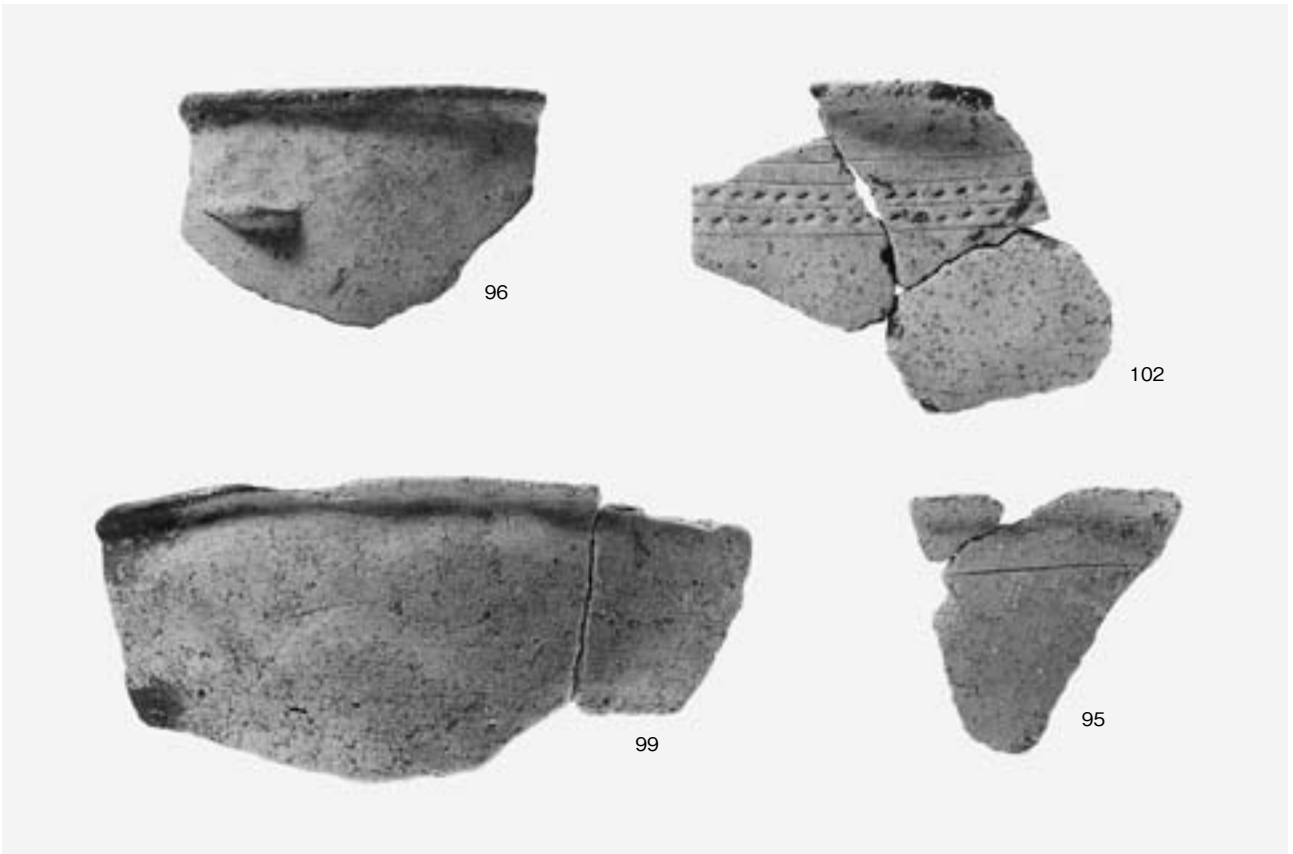
(1)出土遺物 5



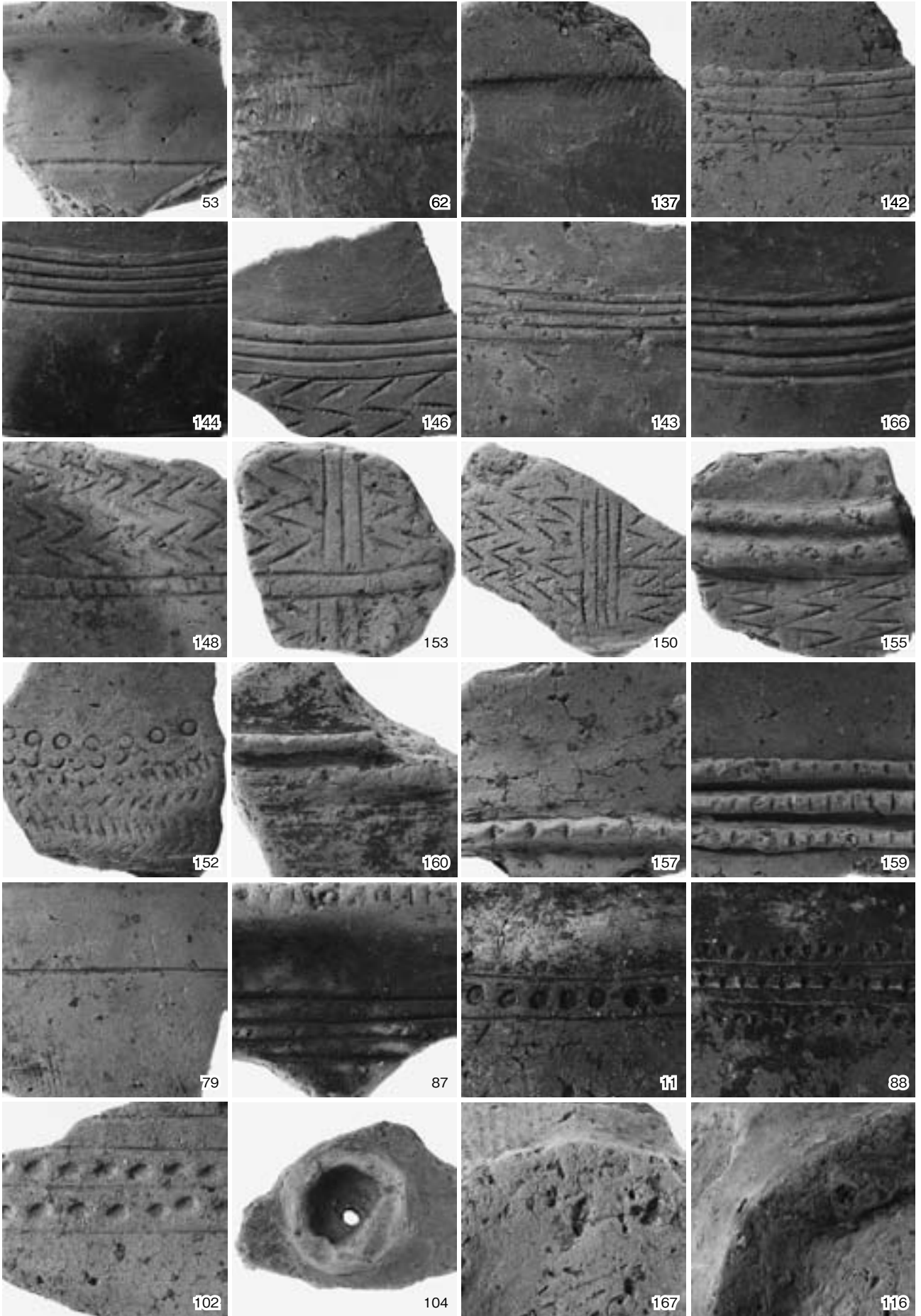
(2)出土遺物 6



(1)出土遺物7



(2)出土遺物8



出土遺物 9



出土遺物10

京都府遺跡調査報告集 第 139 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141